莫逆LORDS

tyuuya

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

莫逆の友

【読み】ばくぎゃくのとも

【意味】気心がよく通じ合っている友。親友。

もしも鈴木悟に気の置けない友人がいたら。

そんなＩＦです。

厨二成分マシマシ、狂気薄め。ライト風味の二次創作。

目次

永遠への旅路 ―― 1
荒野の旅人 ―― 21
砂上のパラダイス ―― 30
ダブルライフ ―― 53
閑話　その後のシモベ達 ―― 70
コーナーストーン ―― 88
コーナーストーン ―― 109

永遠への旅路

西暦２１３８年の空は昏い。
工場から出る重金属混じりの排煙に汚染された真っ黒い雲は分厚く、一日の殆どを太陽の恵みから覆い隠してしまう。
寒々しい人口の光に辛うじて護られた人々は、高く高く聳えるビルディングの隙間を縫って這い回る鼠のように日々を過ごしている。
蠢くような人の群れは数こそ多けれど、その動きに精彩はない。一部の富裕層を富ませるために使い潰されるだけの日々、自身の未来を諦めたものたちの歩みは、どれだけ急いでいようと覇気を欠いていた。

そんな中、淀んだ群衆を二つに切り裂くような動きが起こった。周りとぶつかるのも厭わず、二人の男が人波をかき分けて走っている。

「すいません、通ります！　すいません！」
「やっべ、もう三時だ！　おいサト、急ぐぞ！」
「もう、急いでる、ってのの！　ああもう、トシ！　カギ渡すから先に行って開けててくれ！」
「あいよっ！　どいたどいたぁっ！」

ずんぐりとした小柄な男と、ひょろりと痩せた男が連れ立って走っている。
先を走る小柄な男はぐいぐいと人波をかき分けているが、サトと呼ばれた痩せぎすの男は強引さが足りないのか人の流れに捕まってしまっており、先を走る男にカギを投げ、先へ行けと促した。
先を走る男の名を山根敏之、後ろを走る男の名を鈴木悟と言う。サト、トシ、と呼び合う彼らは会社の同期。１５年に及ぶ付き合いの友人同士だった。

「あーもう、あのクソ課長がっ！　ひと月前から有給取ってるヤツを二人とも呼び出すとか正気かよ！　しかも自分は昼前に帰りやがって、アレ絶対女としけ込んでるぜ？」
「落ち着けって。頭にきてるのは俺も一緒だけど、早くやらないと終わらないぞ！」
「今度絶対あの薄らハゲに一発入れてやる……」

重たい防護服を脱ぎ捨てた二人は、お互いラフな格好に着替えるとすぐに作業へ取り掛かった。背は低いが力に勝るトシが大きな箱から企業用の大容量記憶媒体を取り出し、サトが配線を整えていく。
今日は彼らが１２年の長きに渡ってプレイし続けてきたＤＭＭＯ―ＲＰＧ『Ｙｇｇｄｒａｓｉｌ』のサービス最終日
荒廃した現実の中に生まれた魅力的な仮想世界。数多のプレイヤー達がその世界の虜となり、冒険を繰り広げていった。
その中にあってひときわ異彩を放つ、最凶と呼ばれた異形のギルド「アインズ・ウール・ゴウン」
サトはそのギルド長であり、同じくトシもそのメンバーとして長らくプレイを続けてきたが、時勢の流れやメンバーそれぞれの現実の事情もあり、その構成員は櫛の歯を欠くように徐々に減り続けていき、４１名いた構成員達も、今もギルドに籍を置いているのは二人を含めて僅かに５名。そのうち常時プレイしていると言えるのは、サトとトシだけ。
当時のメンバー総出で攻略したギルド拠点「ナザリック地下大墳墓」を最低限維持できるだけのコストを稼ぎ、後は二人で適当にボスへ殴り込んだり、当てもなくぶらぶらと冒険しては就寝時間を迎え床に就く。そして朝にマンションのエレベーター内で再会し、出勤するというのが二人の日常だった。
「今日はこのまま夜までログインしっぱなしだから、栄養補給とトイレは済ませとかないとな……」
配線を終えたサトが呟く。

明日の午前０時丁度をもってユグドラシルのサービスは終了となる。自身の人生の四割を注ぎ込んだこのゲームは、彼にとっての青春に近いものがあった。

思うところは幾らでもある。

不可思議でユーザーアンフレンドリーな運営会社。

去って行ってしまった仲間たち。

そして、消えてゆく思い出の世界。

もしも自分が独りきりであったならば、生きる気力を失っていたかもしれない。それほどに、今日消え去る世界には彼の人生の思い出の殆どが詰まっているし、実際にサービス終了の発表直後はしばらく呆然としてしまっていた。

そんな彼に、トシがある提案をした。

『ナザリックのさ、バックアップとか取れねぇかな？』

ナザリック地下大墳墓は、元々は６階構成の地下ダンジョンだった。そこへメンバーが各々の技術や財を結集し総出で手を加えていった結果、全１０階構成にして１５００人の大攻勢を僅か４１人で全滅せしめる超鬼畜ダンジョンと化した、ギルドの拠点にして象徴。思い出の最も多く残ったそれを保存できないか、と彼は言う。

確かにＮＰＣの作成などは３Ｄデータを先に作ってからゲーム内にインポートし、そこからゲーム内でブラッシュアップする形を取っていたし、外部とゲーム内との接点は比較的多い。ユグドラシルのシステムに関わるような内部的なデータはともかく、外装など表面的なデータ、またほぼプレーヤーメイドであるＮＰＣはほとんど完全な形で保存する事が可能だろうと思われた。――個人用ストレージにはとても収まらない、圧縮してなお膨大なデータ量という壁を越えられたなら、という但し書きがついたが。

試算してみたところ、バックアップには一般的な個人用ストレージ８７個分が必要という事が分かり、現実に打ちのめされた二人だったが、手分けをしてジャンク市を探し回った結果、サービス終了直前の休日になってようやく企業払い下げの大容量ストレージを発見した。

その後の顛末は御覧頂いている通りである。１日かけて行うはず

のバックアップ作業は上司の妨害行為により大幅に遅延させられてしまったため、突貫で作業を終えなければいけない。一分一秒を争う状況に、二人は急いでパック入りの液体食料を腹に納めた。

「おっし、こっちの通電は問題ない。いつでも行けるぜ、サト」

「ああ、始めるか。――――ユグドラシル、その終わりの始まりだ」

アインズ・ウール・ゴウンの根拠地、ナザリック地下大墳墓。その九層は円卓の間に蠢く異形の影２つ。

一体は金色の獣だった。

全長にしておよそ４ｍ。大型の肉食獣に似た靭やかな体躯と、霊長類に似た器用な五本指を備えた腕は、狩猟者としての理想を体現している。

人とも獣ともつかぬ荒々しい面相には黒い模様が走り、長大な金色の鬣と相まってまるで歌舞伎役者のようにも見えるが、大きく裂けた口からは凶悪な牙が覗く。人の頭など一口で腹に納めてしまえるだろう。

人に似て人に非ず、獣に似て獣に非ず。金色の毛皮と長い鬣を持ち、隆々たる体躯を誇る虎のような妖。

トシのゲーム内アバター『ヤマネ』の姿だ。

もう一体はヤマネよりは人の姿に近いが、その性質は生ではなく死。正ではなく負。悍ましきアンデッド。

凝縮した闇を豪奢な金糸で縫い合わせたかのような漆黒のローブを羽織り、死を削り研ぎ澄ませたかのような鋭さを持ったスケルトン。その肋の下には真紅の宝玉を封じ込め、同じ色の炎が瞳に燃えている。総ての死の支配者たる不死の王、オーバーロード。

サトのゲーム内アバター、アインズ・ウール・ゴウンのギルドマスターでもある『モモンガ』である。

共に堂々たる威容を持った二体だが、今は背を丸めて何やら小さな画面と格闘をしている。「ＮＯＷ　ＤＯＷＮＬＯＡＤＩＮＧ」の文

字の下に表示されている％の表記が９８から９９へ、そして遂に１００に辿り着くと、その役割を終えたコンソールが「ＣＯＭＰＬＥＴＥ」の表示と共に消え去った。
袖を捲り上げ、骨の身体には不釣り合いなデジタル式の腕時計を確認するモモンガ。

「２３時……１２分。うぉお、間に合ったぁぁぁ……」
「いやぁ、思ったより早く終わってくれて助かったな！」
「お前がヘロヘロさんを引っ張り込んで手伝わせた時は鬼かと思ったけどな！　デスマ中で死ぬほど忙しい中で時間を作って来てくれたってのに。ヘロヘロさん、あの後結局寝落ちしちゃったし」
「お陰で余裕を持ってバックアップも済んだし、ヘロやん様様だな！　まぁ、ヘロやんにはあとで礼のメッセージを送っとこう。ナザリックも保存できたし、ユグドラシルⅡでも出たらまた異形種でやろうぜー、って」
「……そうだな、俺もあとでギルメンにメッセージ送っておくよ。ここ何日かバタバタしててそれどころじゃ無かったし、また余裕ができたら是非遊びましょうってさ」
バックアップ作業から漸く開放された喜びに二人は暫し身を任せた。
「さぁて、とりあえずしなけりゃならん事は終わったわけだが、どうするよ？　まだ時間は多少あるが、外の馬鹿騒ぎに倣って花火でも打ち上げに行くか？」
「んー……。そんな気分でもないな。とっととログアウトして、次のゲームを見繕うってのもアリだけど、それもまた味気ないし」
外界からの情報をシャットアウトしている二人には届いていないが、サービス最終日という事でナザリックの外では溜め込んできた資産やレアアイテムをこれでもかと大盤振る舞いするプレイヤーたちで溢れており、さながらお祭り騒ぎの様相を呈していた。
人間サイズの椅子に器用に腰掛け、円卓に足を投げ出しながら問うヤマネと、こちらは行儀よく座り、組んだ手の上に顎を乗せたポーズ

で呟くモモンガ。長い時間を共にした世界であるし、惜しむ気持ちもある。ただ、ナザリックのバックアップが済んだ今、消え行くこの世界自体にはそれほど強い未練は無い。ユグドラシルが楽しいゲームであったのは確かだが、それも共に冒険する相手があってのものだからだ。

もしも目の前の友人が居らず、自身が一人だけであったらと想像すると身震いするものがあるが。

「んじゃ、最後にＮＰＣ揃えて記念撮影でもしとくか？　みんなへのメッセージに画像添付する感じで」

「そうしとくか……あっ！」

「お、どうした？　何か面白い案でもある？」

「……あー、その、だな。ちょっとやってみたい事があるんだが、いいか？」

「なによ？」と首を傾げたヤマネに対し、モモンガは少し恥ずかしそうに、ぽつぽつと自身の希望を語った。

「演説がしてみたい、ねぇ」

「ほ、ほら。俺ってギルドマスターだったけど、基本調整役だったじゃないか。浪漫系のキャラビルドの割にあんまりロールプレイも出来なかったし、最後くらい格好良く決めてみたいんだよ！」

モモンガが羞恥のためか普段より三割増しの速度で捲し立てていく。現実でもゲーム内でも滅多に我儘を言うことのない友人が見せた愛嬌に、ヤマネは破顔した。アバターの表情が変わらないのがこれほど残念に思えたのは初めてだった。

「いいじゃんいいじゃん、やろうぜ。そういやお前、声優の茶釜さんに誘われるくらいにはいい声してたもんな。支配者ロールに乞うご期待といこう」

「サンキュ。でも、あんまり期待はするなよ。ただやってみたいってだけなんだから」

「あいよ。んじゃ、とっととモブを集めてこようぜ。ボサッとして

たらサービスが終わっちまう」

「集めてきたぜー」

「うわ、大名行列みたいになってるぞ。何体連れてきたんだよ」

「とりあえず目ぼしいＬＶ８０以上のＮＰＣ片っ端から連れてきた。そっちは……階層守護者にセバス、戦闘メイド隊とパンドラだけか？　ＬＶ１メイドも連れてくればよかったのに」

「いや、流石に普通のメイド服が異形種の群れに混ざってたら違和感バリバリだろ」

「まぁいいや、時間も押してるしとっとと配置しちまおう」

ナザリック最深部に位置する玉座の間。その更に最奥に聳える巨大な玉座の前にはちょうど演説に向いた開けた空間がある。そこへＮＰＣ達を連れていた二人は、ＮＰＣたちをそれぞれ手分けして配置していく。

最前列にはナザリックのそれぞれの階層を守護する最高ＬＶＮＰＣ、階層守護者達。

その隣にはモモンガが手ずから作成した宝物庫の領域守護者、パンドラズアクター。

ナザリックの家令、セバス・チャンと配下の戦闘メイドたちは室内の壁側にそれぞれ控えさせた。

あとはそれぞれの守護者に対応した階のＮＰＣモンスター達を適当に配置すれば、即席の演説会場の完成だ。

「おーいモモー。こんなもんでいいかー？」

「サンキュ、そんなもんでいいよ。頭数もいるしいい感じに並べられたな。あとは……」

一足先に配置を終えたモモンガは、玉座の横に侍っていたＮＰＣを見た。

透き通るような白磁の肌と、それを覆う滑らかな白絹のドレス。

滲み一つ無い美しき顔（かんばせ）には慈母のような薄い笑みを浮かべており、

米神から生える捻れた角と、漆黒の翼、瞳孔が縦に割れた金眼が無ければ、彼女が女神だと言っても否定できるものは誰もいないだろう。

正直この類の淑やかな女性はモモンガ的にもかなりポイントが高い。

コミュニケーション能力に難のあるモモンガからすれば、感性に何一つとして共感できない派手な女性より、三歩下がって夫を立てるような、前時代的な大和撫子に魅力を感じるのだ。

会場のセッティングを急がねばならないと思いつつ、つい彼女の設定文を覗いてしまう。長い。超長い。

「――ちなみにビッチである、だと……!?」

「ん？　どうしたモモー」

「あ、いや。アルベドの設定を覗いてたんだけどな。タブラさんの性癖がちょっと上級者向けすぎて若干引いてた」

「どれどれ……。ああ、最後の部分か。……ギャップ萌えだったしなぁ。タブッさん」

「ちょっと流石にこれは可哀想な気がするんだが……って、何やってんだ」

「モモンガを、愛して、い、る、と。これでどうよ」

「別ベクトルで酷いことになっただけだろ……もうちょっとこう、違う方向で行こう」

「んー……。とすると、こんなのはどうよ」

『ちなみに未通女である』

「ちなみに、みつうじょ？」

「おぼこ。世間慣れしてない生娘、処女の事だな。アルベドの種族はサキュバスだし、これならタブさんの嗜好にも合うんじゃねぇの？」

「おー、なるほど。アリかもな。……見た目は淑女、種族は淫魔で、中身はまた淑女か。……何というか、イイな。滾るものがある」

「がっはっはっは！　このむっつりめ！　まぁ、アルベドも美人だ

しな。職場にいるカマキリみたいな女どもと比べりゃ月と鼈だわ。……俺もお前も、いい加減本腰入れて嫁さん探さんとならんなぁ」

モモンガがついつい欲望を吐露してしまうが、それを茶化すでもなくヤマネがぼやく。

悟は童貞、敏之は素人童貞であり、互いに彼女いない歴イコール年齢同士だ。この手の話も定期的に行われては虚しくなって解散を繰り返している。下世話な話題も慣れっこだった。

ちなみに敏之が素人童貞となったのは二十代も半ばの頃、悟に抜け駆けしてその手の店へ行ってからだが、彼らの腐れ縁的な友情がその一件で壊れる事はなかった。

自身の記憶からぽっかりと抜け落ちた一夜の事と、その後しばらく悟がやけに優しかったことが関係していると何となく敏之は予想しているが、深くは考えない。あの日のことを思い出そうとすると頭痛がするからだ。

ともあれ、アルベドの設定コンソールを閉じて守護者たちの一歩前に座らせた事で、舞台は整った。

「おっし、モモ！　準備は整ったし時間もあとちょっとだ。やりたい事を存分にやっちまえ」

「……ああ、ありがとう」

ユグドラシルというゲームの、アインズ・ウール・ゴウンの、そして何より鈴木悟と山根敏之の青春とも言えた１２年間の、最後を飾る大演説である。玉座に座りながら瞳を閉じたモモンガは二度、三度と深呼吸を繰り返し、その精神を整えていく。

隣にはヤマネが猫のようなポーズで座ってこちらを見ている。彼との付き合いはユグドラシルとのそれよりも更に長く、他のギルドメンバーが次々とユグドラシルから離れていく中、彼だけは最後まで自身と共に冒険を続けてくれた得難き友人であった。

同じマンションの同じ階と近所に住んでいることもあり、ゲーム内に限らずリアルでも二人は随分一緒に遊んだものだ。遊びに来る度に前世紀の漫画を置いていくものだから、遂には本棚まで置く羽目に

なったし、自身がガチャの沼に嵌って食事を制限していた時には奢ってくれた時もあった。自身は元来内向的な面があり、仕事以外で人と接することが苦手だと自覚している。気恥ずかしさから面と向かって伝えることは無いだろうが、もし彼から「俺たち親友だよな？」と聞かれたなら二つ返事で是と答えるだろう。鈴木悟は山根敏之というお調子者の友人に内心深く感謝していた。

１２年間分の思い出を纏め、咀嚼していく。

そして組み上げる、アインズ・ウール・ゴウンのギルド長としての姿。

今の自身はうだつの上がらぬ営業職、鈴木悟ではない。ナザリック地下大墳墓の長、モモンガだ。

「――行こう」

そして、オーバーロードの虚ろな眼窩に再び火が灯った。

「――諸君。我らがギルド、無上なるアインズ・ウール・ゴウンの下僕諸君よ。

ここに集まってもらったのは他でもない。今日は諸君らに二つ、布告せねばならない事がある。

まず一つは、――この世界、ユグドラシルの崩壊についてだ」

下僕たちから隠しきれぬ動揺がどよめきとなって拡がっていく――様を想像しながら、モモンガは更に言を連ねる。

「我々が運営、開発と呼ぶ、この世界の管理者たち。世界樹から成る９つの世界を支配していた、彼らの力が尽きる時がもうすぐそこまで来ているのだ。

あと少し……そう、千を数える程度の時が過ぎれば、９つの世界は遍く崩れ去る。

そして、このナザリックの私とヤマネを除いた全ても無の闇に消え

去るだろう。
これが一つ目の布告だ。諸君らには悪い知らせとなっただろうな」
ざわめきは更に拡がり、冷静沈着たる階層守護者たちですらその顔を険しく変えている、ような気がする。
だがモモンガはその空気をあえて変えず、過去について振り返っていく。

「思えば我らがこのナザリックを手中に収めてより、決して短くない時が経った。
かつて謂れ無き異形種への迫害に対して立ち上がった我らは、志を同じくする41の仲間と共に数え切れぬほどの闘争と冒険の日々にその身を投じ、確固たる地位を築き上げてきた。
諸君らにも幾度となく働いてもらったな？　討伐隊を僭称する狼藉者たちが雪崩を為してナザリックへ押し入ってきた時には、我らが彼奴らを滅ぼす準備を整えるまで難儀な足止め役を任せてしまったが、諸君らは見事その任を果たしてくれた。
また、あれは我らが氷の魔竜を討伐するためヨトゥンヘイムへ向かった時のことだ――――」

（おぉ、マジかよ……）
活き活きと演説を続けるモモンガに、ヤマネは内心舌を巻いていた。
会社で事務仕事をしている時の覇気のない姿とも違う。
取引先へ出向き、新商品について熱心に説明している時の姿とも違う。
普段とは声質をガラリと変えた、鈴木悟ではなくモモンガとしての、支配者の演説だ。
それも拝聴者を飽きさせずに惹き込むような、緩急を織り交ぜた巧みなものであり、NPC相手とは言え素人であるはずの友人がカンニングペーパーの一つも無しにこのような演説をしてのけている。

まるで、一流の役者（アクター）のように。

ふと、拝聴者の中にいる軍服姿のＮＰＣ、階層守護者の隣で跪く白い仮面のドッペルゲンガーを見遣る。

パンドラズ・アクター。ナザリックの宝物庫を守護する領域守護者であり、アイテムコレクター。

メンバーに伝染されて遅まきながらの厨二病に羅患したモモンガによって生み出され、当初は『旧ドイツ軍風の軍服を洒脱に着こなすが、ハニワ顔と大仰で芝居がかった所作がそれを台無しにしている』という、何ともコミカルなキャラクターであった。

モモンガはこのＮＰＣに殊更手を掛けており、アバター製作に長ける他メンバーに教示を受けながら十回以上のバージョンアップを繰り返した結果、造形も動作も段違いに洗練され、すっかり伊達男となってしまった。

かつて、社会人ギルドだったアインズ・ウール・ゴウンには、趣味人と呼べる者たちが数多く所属していた。

前世紀の特撮マニアだったたっち・みー。

オカルトや神話、宗教学に異常なまでに詳しかったタブラ・スマラグディナ。

自然・環境学に熱心に取り組み、ナザリックの自然分野を一手に担っていたブループラネット。

売れっ子声優だったぶくぶく茶釜や、エロゲーマニアのペロロンチーノと、例を上げればキリがない。

ヤマネにしても前世紀の漫画には一家言を持っており、アバターも当時の名作漫画をモチーフにしている。

だがその一方で趣味や嗜好に乏しい者も若干ながら存在し、その最たる例こそがギルドマスターたるモモンガだった。

彼にとってはユグドラシルで仲間たちと冒険することが何よりの楽しみであったため、ゲーム内のデータ収集には余念が無かった。ただ、それ以外に関してはマニアたちと話を合わせるためにある程度は

齧れど、興味を持って深く踏み込むことは滅多になく、漫画の話を出来るようになるまでヤマネも大層難儀したものだった。
そんな無趣味なモモンガだったが、そういえば彼の家でヤマネのマンガ以外の本や映像ディスクを見かけた事があった。
パンドラズ・アクターが初めてお目見えとなった当初、そのクルクルシュピンな動作は一部の厨二病患者以外の腹筋を豪快に破壊した。その後躍起になってバージョンアップを重ねていた彼の家には、資料としてか演劇や演説の映像資料が並んでいたのだ。
厨二病に罹ったモモンガは自身を投影する先としてパンドラズ・アクターを創った。そしてその過程で自身の欲求を知り、演技についての興味を持っていったのかもしれない。
厨二病も案外馬鹿に出来たものではないな、とヤマネは思う。
あの無趣味だった親友がこれだけ活き活きとしているのは随分久しぶりだ。

（ただ、そろそろ時間が……）
かつての冒険について思うままに語っているモモンガだが、現在時刻は２３時５４分。このままだとどう考えても時間が足りそうにない。
（まぁ、それもアリかもな）
気の済むまでやらせて、ゲームが落ちて素面に戻ったら盛大にからかってやろう。人の悪い笑みを浮かべたヤマネは、一つ年下の親友を生暖かい目で見守ることにしたのだった。

「――そしてアインズ・ウール・ゴウンの名は９つの世界に轟き、比肩する者たちすら片手で足りた。我らの名を聞くだけで敵対者たちは震え上がったものだ。
ああ、我らはこのユグドラシルという世界においてまさしく輝いていた。
……そう、輝いていたのだ。

――――全ては、遠き日の栄光に過ぎん。

時が経ち、４１人の仲間たちの殆どはその力を減じ、この世界への干渉を制限されていった。

ヘロヘロらのように辛うじて実体を残している者たちも、往時のように活動することは叶わず、今や自由に動けるのは私とヤマネだけという体たらく。

かつて１５００の軍勢を鏖殺せしめた難攻不落のナザリック大地下墳墓も、もしまた同様の軍勢を相手取ったならば一溜まりもなく叩き潰されることだろう。

……ああ、ああ、認めよう。

我らは、アインズ・ウール・ゴウンは衰退した！」

骨の拳を強く強く握りしめ、絞り出すように言葉を紡いでいく。

それはモモンガとしての言葉だっただろうか、それとも鈴木悟としての言葉だっただろうか。

引退していく仲間たちを表向きは笑顔で見送りながら、心中には恨めしく思う気持ちが無かっただろうか。

もし彼が独りぼっちであったならば、喚き散らしていたかも知れない。自暴自棄になっていたかも知れない。

だが鈴木悟には山根敏之がいたし、モモンガにはヤマネがいた。そうはならなかった。

だからモモンガは演説を続ける。

自身の無念すら、今は言葉に力を持たせるエッセンスに過ぎない。

悪感情を昇華させ、更にその演技は熱を増していく。

（……あれ。今、何時だ？）

モモンガとはまた違う感慨を持ってその姿を眺めていたヤマネ

だったが、ふと気付く。
――――現在時刻は０時４分。サーバーダウン予定時刻は０時だ。
しかし二人の意識は未だアバター内にあり、ゲームがダウンする素振りすら見えない。

「なあ、モ「だが！　それがどうしたと言うのか。
ナザリックにかつてほどの光は灯っていない。ああ、それは認めよう。
だが、私はまだここにいるぞ、ヤマネも、もちろん諸君らもだ。
形の有るものも、無いものも、ここにはあまりにも沢山の宝が詰まっている。
友情があった。
諍いがあった。
創造があった。
破壊があった。
喜びが、悲しみが、憎しみが、慈しみが、絶望が！　希望が！　そして感動が！
ありとあらゆるものが、ナザリックと、アインズ・ウール・ゴウンと共にあった！
そうだろう？　違うか諸君！
ナザリックと、諸君らと、そして我々とが紡いできた歴史は、決して軽いものではないッ!!」

モモンガのテンションは最高潮であった。
隣のヤマネが何事か声を掛けてきた気がするが、放っておく。この勢いを殺すことはできない。
激情を全身で現すように大仰に腕を振るい、握りこぶしで胸を叩く。
支配者を演じる自身の威が観客たち全てに届くように。全てが圧倒されるように。
興が乗り過ぎて操作を誤り、暴発したスキルのせいで黒いオーラが

背後から立ち上るが結果オーライだ。
威に呑まれ、動くことも出来ないという設定の下僕たちを睥睨し、ゆっくりと足を踏み出す。
一歩、二歩、三歩と段を降り、下僕たちと同じ高さまで来ると、先程までとは打って変わって優しい声で語りかけ始めた。

「いや、だ「だが我々と共に掛け替えのない時間を過ごした諸君らが、＜＜たかだか＞＞世界の崩壊程度でその存在を消し去られてしまうなど、決して許されることではない。
故に諸君よ、安心するがいい。私とヤマネは力を尽くし、諸君らが＜＜そう＞＞ならぬようにした。
少なからぬ労を要したが、我らはこのナザリックを丸ごと保護することに成功した。
諸君らを、我らの来るべき新世界への旅路へと同道させる事を可能としたのだ！」

再び下僕の内に大きな動揺が走った。
絶望と悲嘆に染まっていた下僕たちの顔は、瞬く間に驚嘆と歓喜へと塗り替えられていく。
ふと視線を落とせば、呆然と眼を見開くアルベドの金色の瞳が見えた。
スッと膝を落とし、瞳から零れ落ちんばかりに溜まっていた涙を優しく拭ってやると、踵を返し、再び玉座へ立ち戻る。次の言葉を今か今かと待ちかねている下僕たちをゆっくりと見回し、ギリギリまで焦らしていく。
……ヤマネが何やら不貞腐れているが、まぁ終わったあとでフォローすればいいだろう。

――さあ、最後の仕上げだ。

「さあ、これから我らと諸君ら――いや、我々には新しい世界が

待っている。
それはひょっとしたら我々にとって生き難い世界かも知れぬ。
もしかしたら我らでも歯が立たぬ、強者に溢れた世界かも知れぬ。
苦汁を舐めさせられる事もあるだろう。
堪え忍ぶ事も時には必要だろう。
だが、旅はまだ終わっていない。夢はまだ潰えていない。
ユグドラシルにおけるアインズ・ウール・ゴウンの伝説はここで幕を閉じるが、これから待っているのは新たな地での新たな冒険だ。
衰えたというのならば、雌伏し再び力を溜めよう。
世界が消え去ると言うのならば、冒険の舞台を移そう。
そして最初から始めて、一歩、また一歩と世界へ踏み出して征こうではないか！

元より我らは冒険者。危険を冒し、未知を知り、未来を手にすることこそ、その本懐！
そして世界の全てを知り尽くしたその暁には、また新たな世界で全てを始めるのだ。

ああ、諸君よ、親愛なる我がナザリックの下僕諸君よ！
私は楽しみだ。楽しみでしょうがないぞ！　諸君らとまた共に征けることが！

我々が旅を続ける限り、この想いを失くさぬ限り、私は冒険者として滅びることはないだろう。
己を知る者に忘れられた時、その者には本当の死が訪れるという。
私は友たちを忘れない。ナザリックを忘れない。アインズ・ウール・ゴウンを忘れない。
であれば、私が滅びぬ以上、その総てが永遠となる。

諸君らも、ナザリックも永遠である。
そして、アインズ・ウール・ゴウンも永遠である！

さあ――――征くぞ、諸君!!」

（――――決まっ、たぁ……!）

心地よい疲労感と確かな満足感が体を包む。
大きく手を広げ天を仰ぎながら、モモンガは己の演説の余韻に浸っていた。
ぶっつけ本番であったが、よくもここまで上手く行ったものだと自画自賛する。
本職のそれに比ぶものではないにしろ、素人としては上々ではないだろうか。

（あー、サーバが落ちたらすぐ寝なきゃな……。呼び出しで有給潰した挙句に翌日も普通に出てこいって言うんだからなぁ。転職なんて望めないし我慢するしかないんだけどさ）
思考がモモンガのそれから鈴木悟のそれに切り替わり、そういえばヤマネが何か言いかけていたな、と顔を戻した瞬間。

「「ッウオォォオオオォォオオオオオッ!!」」

玉座の間が、爆発した。

「ナザリック万歳ッ！　モモンガ様万歳ッ!!　アインズ・ウール・ゴウン万歳ッ!!」
「至高なる御方に栄光あれ！　偉大なる旅路に未来あれ!!」
「我らナザリックの下僕一堂、全ての忠誠は御方々の為にッ!!」

涙を流せる下僕たちはその悉くが滂沱の涙を流し、それでもなお抑

え切れぬ感情の波濤を声に乗せてモモンガを、アインズ・ウール・ゴウンを讃えている。
沈着冷静と設定されている筈のデミウルゴスが、その顔をくしゃくしゃにして尚殺し切れぬ嗚咽を洩らし、
涙を流せぬ蟲族のコキュートスは、四本の腕を大きく振り上げ万歳三唱を繰り返す壊れたスピーカーと化し、
紳士を体現したかのような家令、セバスは片手で顔を覆い下を向いているが、その指の隙間からは手袋が吸いきれなかった涙がぽたり、ぽたりと溢れ落ちていた。

「……え、ちょ、モガッ!?」

これ、どういうこと？
そう続ける筈だった言葉は、飛び込んできた幾つもの影に中断させられた。

「ぼ、ボボンガざば、ボボンガざばぁっ、どごばでもお供いだじまずぅぅっ!!」
「僕も、ぼくもぉっ……！」
「モモンガ様、うぇぇぇ……」
シャルティア、マーレ、アウラと守護者の中でも幼いものたちが全力で抱きついてきたのだ。
涙と鼻水と流れた化粧で顔がグチャグチャになっているが、それでもしがみ付く力を緩めないシャルティア。
ちょうどモモンガの下腹部辺りにある頭を、抱きつきながらグリグリとこすりつけているせいで非常に怪しい構図になっているマーレ。
二度と離さない、とばかりにモモンガの腕を取って抱きしめるアウラ。
「あ、貴方たち！　モモンガ様に無礼を、無礼を……ふ、ふぇぇぇぇぇぇん」
そして、何とか守護者統括としての責務を果たそうと掣肘するも、

口を開けた瞬間に感情が抑えきれず泣き出してしまうアルベド。
総勢１００体を数える高レベル異形種が揃って熱狂するさまは、正しく地獄絵図の様相を呈している。

「……俺しーらね」
一歩引いて、唯一冷静に一部始終を観ていたヤマネであるが、彼として何故このような状態になっているかは皆目見当がつかない。
サーバダウンが起こらない。それどころかコンソールが開かずログアウトさえできない。
ＧＭコールが利かない事も確認したところで、彼が一人で出来ることは終了した。
後はあそこで自身の支配者を揉みくちゃにしているＮＰＣと、混乱してされるがままの墳墓の主が落ち着いてから相談する事にしよう。
蚊帳の外に置かれたもう一人の支配者は猫のように丸まり、助けを呼ぶ親友の声を子守唄代わりに不貞寝を再開したのだった。

荒野の旅人

「――あー、落ち着いたか？　お前たち」

たっぷり半刻の熱狂を経てようやく落ち着いた下僕たち。

そのうち最高ＬＶの守護者たちのみを残し、モモンガは努めて威厳を持った言葉で話し掛けた。

「はっ、お見苦しい姿をお見せしまして、誠に――」

「ああ、よいよい。泣かせたのは私だからな。それよりも、今は何より優先せねばならない事がある」

朗らかな態度から一転して真剣な雰囲気を纏ったモモンガに、まだどこか恥ずかしげだった守護者たちが顔を引き締める。

「……それは、先程仰られていたユグドラシルの終焉に関わる事となりましょうか？」

『あと１０００と数えぬうちに』と語っていたのを記憶していたのだろう。真っ先にデミウルゴスが答えに行き着いた。その通りだ。とモモンガが重々しく頷く。

「本来はあの時点でユグドラシルは終わりを迎えている筈だった。私の予定では世界から弾き出された後、お前たちを安全圏へ保護してからじっくり新世界を見繕っていく予定だったのだが……おい、ヤマネ。いい加減起きろ」

スタッフ・オブ・アインズ・ウール・ゴウン。最凶ギルドと呼ばれた全盛期のギルドメンバーが総出で労力と財力を注ぎ込んで生まれた最も世界級（ワールド）アイテムに近いギルド武器。その石突を贅沢に使って

ヤマネの脇腹を穿つ。
「ぎゅにっ!?」と形容し難いうめき声が響いた。

「守護者たちよ！　ナザリックは現在未曾有の異変の中にある。階層守護者は各々の守護する階層へ戻り、異変が無いか調査せよ。
パンドラズ・アクターは宝物庫、セバス達は9階層だ。それに……アルベド！　デミウルゴス！」
「「はっ！」」
「ここがユグドラシルではない可能性は非常に高い故、時間と情報は何よりも貴重となる。であれば……行うべきは何か、分かるな？」

丸投げとも取れる問いかけだが、ナザリックでも有数の知恵者である二名は即座に答えをはじき出していた。

「はっ！　直ちにシモベ達を選別し、周辺地形と戦力の確認、及び情報の収集を行います！」
「また、広範囲の偵察には姉、ニグレドの能力が最適と考えます。彼女を主軸とした探査網の構築にご認可を頂けますでしょうか」
「うむ、許可する。――これは厳命するが、当面は安全性を第一に考えて任に当たり、不用意な戦闘行為、敵対行動は避けよ。
我々のこれまでの常識が通用する世界とは限らんし、いくら情報が大切とは言えど、お前たちの代わりなど居ないのだからな？」
「はっ、ご芳情に感謝致します！」
「よし。では私はこの駄妖と膝を突き合わせて話し合わねばならん事がある。重要と判断した報告はメッセージで寄越すがいい。
諸君の奮励努力を期待する。では、散開！」

モモンガの号令を合図とし、守護者たちは足早に各々の担当領域へと戻っていく。
最後にセバスが一礼して音も無く扉を閉めると、先程の熱狂が嘘のように玉座の間は静寂に包まれた。

二人だけになった王座の間にパチパチパチと、拍手の音が響く。

「すげぇなモモ、完璧な支配者ロールだったじゃねぇか！」

ヤマネの声には本気の感心が込められていた。

同じ状況であそこまで完璧にロールをこなすなど自分には無理だろう。状況把握に意識が行って守護者たちへの対応が疎かになるのは目に見えているし、いっそ腹を割って車座になり相談を持ちかけていたかもしれない。

それが悪いとは一概には言えないが、立場に罅が入ってしまう可能性も否定できない。引き換え今回のモモンガの対応は最善に近いと言えた。

だが、モモンガからの反応はない。

「……モモ？」

見ると、骨となった手や顔、ローブに付いた装飾などをペタペタと触っている墳墓の王の姿。

暫くそうしていたが、触感に納得が行かなかったのか、今度は何やら伸びたり縮んだりしながら息みだす。

余りにも不審なその姿にもう一度呼びかけると、不思議そうに首を傾げた友は一言叫んだ。

「……え、夢じゃない!?」

「うおぉーい!?」

そう。実はこの男こそが最も現状に対応できていなかった。

守護者たちに抱きつかれた辺りで彼の思考回路はオーバーフローを起こし「ぼくのかんがえたかりすましはいしゃ」の演技を機械的に

続けていたのだ。
全ては自身の想像から生まれたイメージだと信じて。
「――纏めると、ユグドラシルにあったゲーム的な要素が全部消えてる。強制ログアウトも勿論できない。そして感覚なんか無かったはずのアバターには感覚が通ってて、自分の身体として動かせる、と」
「魔法なんかは感覚的に使い方が分かるみたいだ。いちいちカーソル動かして指定しなくていい分、こっちの方が便利だな。アクティブスキルはどうだ？」
水を向けられたヤマネはちょっと待て、と答えて目を瞑った。
金色の獣の身体がギュルギュルと高速で捻れ、その原形を失っていく。
体長４ｍ、直立状態でも２ｍ半はあるその巨体は捻れながら徐々にその体積を減らしていき、回転が止まった時には身長２ｍ弱、隆々たる褐色の体躯を持った黒髪の男に変じていた。ヤマネの種族『アザフセ』のスキル、擬態である。
「ん、こっちも問題無さそうだ。まだ全部を試したわけじゃねぇが、ゲームで出来たことはそのまま出来るみたいだな」
二人があれこれと現状把握に勤しんでいると、モモンガにメッセージが届いた。
『御協議中失礼致します。モモンガ様、少々宜しいでしょうか？』
「ん？　――デミウルゴスか。どうした」
『はっ。ナザリック周辺の調査についてですが――』
……すげぇなー、と呟くヤマネ。
今の今まで自身と素で話していたモモンガが、僅か半拍の溜めで支配者としてのそれに切り替わった。

威厳のある声で相槌を打ち、時折相手の褒め、労を労うことも忘れない。
報告の内容は悪いものではなかったようで、多少ホッとした雰囲気を漂わせているが、それでも油断はせぬように、とデミウルゴスに申し付けて報告は終わり、メッセージが切れた瞬間にまた元のモモンガに戻る。この切り替えの速さよ。
厨二の一念、岩をも通すというやつだろうか。と益体もないことを思った。

「その感じだと、ひとまずの危険は無さそうってところか」
「そうだな。なんでもナザリックの外は見渡す限りの草原。今のところ魔獣でも何でもない小動物くらいしか確認されてないとさ」
「そっ、か」

それは、ある意味で希望を絶つ事実だ。
ＮＰＣ達が拠点から出ることができないのなら。
ナザリックの外にユグドラシル時代と同じ毒の沼地が広がっていたなら。
彼らは全く新しいゲームの世界へ移行したのでは、と想像することもできた。
だが調査が進むごとにユグドラシルの残滓は払拭されてゆき、鈴木悟たちの生きていた現実とはまた違った現実感が彼らを包み始める。
――それを絶望と感じるかはその者次第だが。

「……いやー、残念だな！　明日からまた楽しい楽しい仕事が待ってたのになぁ」
「ひひっ、確かに。あのハゲの頭を思う存分しばく機会が失われちまうのは無念の極みだ！」
「じゃあどうする？　現実に帰る方法を探すのか？」
「冗談だろ。あのクソッタレな世界に帰りたいなんて思う奴がいるもんかよ」

このままじゃクビ待った無しだと大袈裟に嘆いてみせるモモンガ。
それを笑い飛ばすヤマネの声にも強がりの色は見えない。
鈴木悟に家族は居ない。
山根敏之に家族は居たが、居ないのと同じだ。
二人の世界はひどく狭い。
自室と勤め先を除けば、買い出しに使う近所の総合量販店と、ジャンクを漁ったヤミ市場程度が彼らの行動範囲であり、それは、あの時代に生きる下流国民の有り触れた姿でもあった。

あの世界で鈴木悟と山根敏之の未来に明るい光が灯ることは、恐らく無かっただろう。
だが、ここであればどうか。未知の世界には光はあるのか？
井の中の蛙大海を知らずと言うが、いざ大海に放り出された蛙は何を想うのだろうか。
たとえ潮に灼かれるとしても、恐ろしき大魚に一飲みにされるとしても、広い世界へ漕ぎ出して往きたいとは思わないだろうか。
モモンガの空っぽのはずの脳裏に、かつて共に冒険し、そしてリアルへと還って行ったもの達が映り、そして消えていく。

「……なぁ、トシ。覚えてるか？　ここを落(ナザリック)として、ワールドアイテムを手に入れてさ。難攻不落のラストダンジョンにするぞー！
って、みんなで躍起になって素材を集めて。
タブラさんなんか、自分好みのギミックを組み込みたいっておっそろしい額の課金してさ。
ホワイトプリムさんはメイド一人ひとりに設定作ってからデザインするくらい入れ込んでさ。モーション設定に付き合わされたヘロヘロさんが悲鳴あげてたよな。
……楽しかったよなぁ。俺、あの頃が一番充実してた気がするよ」
「覚えてるさ。みんなひと癖どころか二癖三癖当たり前みたいな連中だったからな」

ちなみに、ヤマネはヤマネで部屋に入り切らなかった漫画を電子化してナザリックの図書館の一角に収めており、バックアップを取ろうと持ち掛けた理由の半分はコレクションが失われるのを惜しんでのものだ。

「彼らはみんなリアルへ帰って行ったけど、どうしてか俺達はまだここに残ってる。
もう少し、いいのかな？
おっかなびっくり、知らない世界の中でさ。
彼らが遺していった子供達（NPC）と一緒に世界を旅して、探して。
困って、悩んで、苦しんで。
喧嘩して、いがみ合って、でも最後には笑って。
生きる事を、楽しんでもいいのかな？」

猫背気味に座り膝の上で手を組む。鈴木悟がよく取る体勢で、モモンガが俯き加減に呟く。
消え入りそうな声からは、焦燥感と、罪悪感と、そして確かな期待が滲んでいた。
しかし、友から掛けられた言葉は、肯定でも否定でも無かった。

「バカだろ、お前え」
「……へ？」
「楽しむも何も、それ（生きるの）は大前提だろうが。
俺も、お前も、んでＮＰＣ達も、今起きてる事が現実であって、それが変えられる訳でもない。
だったら今を精一杯生きるのは当たり前のことじゃねぇか。良いとか悪いとかそういう話じゃねぇだろ。
それを楽しみたいなら楽しめばいいが、それはお前が自分で決めることだ。誰が許可するもんでもねぇ」

唇を歪め、呆れたように鼻を鳴らしながらモモンガの言葉を一笑に付すヤマネ。
これだから、この生真面目な親友からは目が離せないというのだ。
「……そんなもん、か？」
「そんなもんだよ。難しく考え過ぎだ、お前は」
こてん、と首を傾げて問いかけるモモンガ。そのポーズは骨がやっても可愛くはない。
だが表情こそ読み取れないものの、彼の声は常のそれに戻っていた。全く、世話の焼ける支配者だ。
「だから、今はそれぞれやるべき事をやれってこった。あれだけ慕ってくれてるＮＰＣ達を悲しませたかないだろ？」
先程のモモンガの演説が思い起こされる。
一歩引いた位置から眺めていたヤマネには、あの場に居た全てのシモベたちの反応が見えていた。
モモンガの言い放った衰退という言葉に打ちのめされる様も。
新世界へ共に連れて行くと宣言された時の抑え切れぬ高揚も。
涙を拭われた時の守護者統括の頬の赤らみも。
そして演説が終わった直後の感情の爆発も。
彼らの瞳にあったのは忠誠や尊崇、或いは思慕の念。そこに悪意は欠片も存在せず、総ては彼らが自分達を慕う想いで溢れていた。
シャルティア達に揉みくちゃにされていたモモンガとて、その事は理解している。泣きじゃくり真っ赤になった瞳で、それでも嬉しそうに自身に縋り付いていた彼女らの忠誠を疑う気は無かった。
「そうか……そうだな。
じゃあ、俺たちも俺たちに出来ることをしよう。まずはどうするか……。外の世界も気にはなるが、ゲームの仕様との違いなんかも一通り試していかないと、いざという時に足を掬われかねないよな」

「俺らにしか出来ないってとその辺だな。ナザリックの運営とか指揮は正直アルベドとデミウルゴスに任せときゃいい気がする。さっきの応答からしてアイツら間違いなく俺らより優秀だぞ」

違いないやと笑う。

悩もうと悩むまいと、現実は背後から迫る壁のようにその背中を押してくる。

押されるままに惑うのか、それとも先んじて歩みを進めるのか。決めるのはいつだって自分自身で。

自分達で進むことを決めたこの瞬間に「鈴木悟」は「モモンガ」に。「山根敏之」は「ヤマネ」になった。

余談ではあるが、この数ヶ月後。

「――騒々しい。静かにせよ。

……どうだ？　この角度の方がいいか？」

「アーウンウン、イインジャナイカナ」

「そうかそうか！　じゃあ次はこっちなんだが……」

（……やっべ、帰りてぇー）

配下に尊敬される支配者ロールの模索に余念のない親友に付き合わされ、憔悴するヤマネの姿があったとさ。

砂上のパラダイス

ナザリックが原因不明の異変に見舞われてより３８時間の時間が経過した。

モモンガは種族特性により睡眠が不要。ヤマネにしても睡眠は可能であれ必須ではない。そのため二人はログアウト制限に縛られずゲーム内生活を楽しんでいるような感覚で、ユグドラシルと現在の差異についての検証を精力的に行っていった。

その検証結果としては『ゲーム仕様を可能な限り現実に反映させたならばこうなるだろう』というものだった。

例えば、魔法職による戦士職装備の運用。

例えば、職業スキルがない状態での専門行為。

特に後者に関して言えば、現実で料理の心得があったヤマネすら料理を始めた瞬間に意識が飛び、炭素の塊を作り出してしまった程だから、ゲーム内のスキルや設定が忠実過ぎるほど忠実に反映された結果だと言える。

二人がひとまず思い付く限りの検証を終えると、デミウルゴスよりの打診により調査結果の報告を含めた第一回ナザリック方針会議の開催が決定。

幹部会議ということで当初は円卓の間で行うつもりでいたモモンガだったが、必死な顔をしたシモベ達の満員一致での辞謝により思い直したため、会議は一時間後、別途用意されていた少人数用の会議室で行われることとなった。

支配者ロールの研究に余念がないモモンガのかっこいいポーズ披露会から逃走したヤマネは、会議が始まるまでの時間を潰すべく部屋を出た――ところで腹部の異変に気付いた。

ぐうううるるうううう……！

「……おぉ、すげぇ腹の音。そういやログアウトしてねぇからまだ何も喰ってなかったんだな」

料理をした時は結局炭になっちまったから喰ってねぇし、と独りごちる。予想外すぎる自体についついはしゃぎ過ぎ、飲食も忘れて打ち込んだ結果だった。

獣の唸り声のような轟音に支配者としての威厳の失墜が一瞬脳裏を過ぎるが、幸い誰にも聞かれていないようだし、時間もちょうど昼飯時。ユグドラシル飯を堪能する良い機会だと食堂へと歩を進めることとしたのだった。

ユグドラシル九層で清掃を始めとした雑務に携わる４１名のメイドたち。彼女達にとって清掃は神（プレイヤー）から与えられた使命であり、日々それを万全にこなす事こそが喜びであるのは当然の事である。

だが、それ以外には喜びは無いかと言えば勿論そんな事はなく、同階層に設けられた食堂で空腹を満たすこと、同じメイドの同僚と歓談に花を咲かせること、また可愛らしい同僚を愛でること――等々、それぞれに個性があり、厳格に職務にあたる忠実な下僕として以外の一面も持っている。

モモンガに命じられた異変の確認を終えたメイドたちは、緊張感こそまだ拭いきれてはいないものの、再び通常通りの職務に戻る事が叶っており、各々のスケジュールに従い食堂で食事を取っていた。

「――それで結局、ナザリックに起きた異変って何なのかしらね。至高の御方々のお部屋から廊下までくまなく確認したけれど、これと言った異常は見つからなかったのよね？」

「私にも分かりませんが、モモンガ様が仰られたのだから、何も起こっていないなんて事は有り得ないはずです。守護者の方々も動いているでしょうし、それぞれの役割をきちんと果たし続ければいいのではないでしょうか」

「そうだねー。デミウルゴス様の指揮で探索隊が組まれたって話だ

し、何が起こったのかもきっとすぐに分かるようになるんじゃないかな！」

話した順番に名をシクスス、フォアイル、リュミエールと言う。彼女たち一般メイドの種族はホムンクルス。異形種でありながら人族とほぼ変わらぬ身体能力しか持たない彼女らは、種族特徴として不老という長所と大食という短所を持っている。

こうして和気藹々と会話をしている間もチーズオムレツとマッシュポテトが破竹の勢いで消費されており、そんな彼女らの胃袋を満たす為に食堂のビュッフェ台には山盛りの料理が用意されていた。

カリカリのベーコン、ほうれん草のソテー、サクサクのガーリックトースト、チキンのトマト煮――様々な料理が所狭しと並べられたビュッフェ台から骨付きの肉を一つ掴み、彼女らに赤い影が音も無く忍び寄る。

「なーんの話してるっすか？」

「ひゃわわぁっ!?」

ガバッ！　とフォアイルの後ろから顔を出した影に、三人が仰け反って悲鳴を上げた。

「も、もうっ！　ルプスレギナさんったら！」

「あはははっ！　いいリアクション頂きましたーっす！」

燃えるような赤髪に褐色の肌、金眼。悪戯な笑みを浮かべた影の名はルプスレギナ・ベータ。三人の同僚にして戦闘力を与えられた戦闘メイド達の次女にあたる。

嗜虐嗜好を持ち、弱者を甚振って遊ぶことを好むルプスレギナだが、強い連帯関係で結ばれたナザリックの仲間達にそういった攻撃性を向ける事はない。が、その代わりに気配と姿を消して驚かせたりするイタズラをもってコミュニケーションを図る困った性質があった。

「それでそれでっ、何の話だったんすか？」
「はぁ……。この前、ナザリックに異常が無いか調査するようにご命令が下ったでしょう？　結局九階層には何の異常も起きていなかったけれど、一体何が起きているのかなーってね」

動悸の治まったシクススが答えると、ルプスレギナが「そうっすねー……」と首を傾げる。彼女は戦闘メイドとしてモモンガが命を下したまさにその場に同席していたが、正直なところ詳しいことは理解していなかった。大局的なことは智者が理解していればいいし、一戦闘メイドである自身は下った命を遂行するだけだと割り切っているためでもある。

「世界が滅ぶはずだったのをモモンガ様とヤマネ様が何とかしてくれたらしいッスけど、詳しい話は私にはよく分かんなかったっす！」

あの時のモモンガ様は超絶カッコ良かったっすよー！　と能天気に笑うルプスレギナだったが、その発言は火に油だ。食堂内が一気に騒然となる。

ナザリックの現状は三人以外のメイド達にとっても気になる事柄であるし、彼女たちより至高の御方に近いルプスレギナに注目し、耳を欹てていた者は少なくなかった。そこに来てこの爆弾発言である。

「ちょ、ちょちょちょ、何それ!?　知らないうちに私達大ピンチだったってこと!?」
「みたいっすねー。
『だが私達が二人で何とかしたから安心しろ。私達はずっと一緒だ、どこまでも付いてこい！（意訳）』
みたいな感じで、みんな感動でボロ泣きだったっす！」
「うわ、それヤバいわ……。羨ましすぎるんですけど」

驚愕からの注目が嫉心からの注目に変わっていく。
最後まで自分達を見捨てずにナザリックと共に在ってくれた至高の御方々。
ナザリックの危機をさらりと救ってくれただけでなく、そんな偉大なるお方がわざわざそれを明かし、これからも自分達を導いてくれるとしっかりと約束してくれたというのだから、そんな場面に居合わせた同僚にはそれは嫉妬くらいは湧こうというものだ。モリモリと。

「でも、今の状況はそれとはまた別の異変で、だからその調査をデミウルゴス様達にお任せになったんだと思うっす。さっきアルベド様と一緒に何か相談してたから、報告会とかやるんじゃないっすかねー」

そっかー。とシクススが相槌を打ち、それに伴って耳を皿のようにしてルプスレギナの近くに寄っていたメイドたちの輪が少しずつ散っていく。聞く限り目下の危険は去っているようだし、いずれ分かるのであればそれでいいか、という気分になっていた。

「一般メイドのみんなもそうだけど、戦闘メイドの私らもジッサイ戦力としてはあんまし当てになんないっすからねー。いつも通りじゃない命令が下った時に備えながらいつも通りにしてればいいと思うっすよ」
「そうね、そうしましょうか。
――それはそうとして、モモンガ様のお言葉を教えて下さい。可能な限り、詳しく」
「わ、ちょっ!?」

フォアイルの言葉で、再び食事に戻ろうとしていたメイドたちの耳が再び皿になり、包囲網が構築し直された。
御方直々の演説など、ナザリックの者にとっては垂涎の舞台に他ならぬ。彼女らが味わったその時の感動を少しでも共有すべく、ルプス

レギナにずずいと詰め寄るのだった。

「『アインズ・ウール・ゴウンも永遠である！』
……ってな感じで、もう凄かったんすよ！」
「「おぉー……」」

身振り手振りを交えたルプスレギナの迫真の演技に一般メイドたちが食事の手を止めて感嘆の息を洩らす。
人間の心の隙を見つけてはそこを突き、絶望に叩き落とすのが好きという彼女の趣向は演技力にも表れており、その再現力はなかなかのものだ。

「やっぱい、モモンガ様カッコ良すぎ……」
「私、その場にいたら卒倒してる自信あるわ……」
「むしろ死ぬかも。こんな幸せな死に方ないわー」

各々思い思いに目を瞑ってはルプスレギナのドヤ顔をモモンガのボーンフェイスに置き換え、御方の演説を脳内で堪能している。ルプスレギナもえっへんと胸を張り誇らしげだ。
そしてそれ故に、彼女らは第二の影に気付かない。

ヤマネは食堂に到着する前に、スキルを使って人間の姿へと変じた。元の姿のままだとサイズが大きすぎて邪魔になるだろうというのと、妖の姿で巨大な骨付き肉に豪快に齧り付くのも捨てがたいが、最初はやはり人間として食事を取ってみたいという気持ちがあったためだ。
何やら中が騒がしいが、それも当たり前のことだろうと思い直す。
自身も昼食時ということで食堂に来たのだから、食堂は本来の使用者であるメイドたちの食事中に決まっている。決まっては、いるのだ

が。

「(……やっべ、冷静に考えたらうざってぇ上司だな俺)」

今更ながらに部下――それも例外なく見目麗しい女性だ――だけで構成された空間に割って入ることの難しさを思い、ヤマネの背中を冷や汗が伝った。

自分が平社員だった頃を思い出す。

もし自分が食事している最中、隣に会社の取締役が座ったとする。さて、食事の――数少ない憩いの時間はどうなるか。

少なくとも自身であれば飯の味など判るまい。緊張で何を喰ったかも覚えていられない事は想像に難くなかった。

しばし顰めっ面で扉を開けるか逡巡するが、再び腹の虫が騒ぎ出し始めたため覚悟を決める。

守護者たちの忠誠心を見るに悪感情を持たれていない事はハッキリしているのだから、自身の想像ほどは酷いことにはなるまい。なんならテイクアウトという手段もあることだし。

「――よしっ！　開けるかっ」

覚悟を決めて扉を押し開くが、ゆっくりゆっくりと音を立てずに扉を開けるその姿からは、上位者としての威厳は欠片も感じられなかった。

「……おやぁ？」

『――――そしてアインズ・ウール・ゴウンの名は９つの世界に轟き……』

メイド達の視線が集中する事を懸念していたが、意外なことに視線

は一切突き刺さってはこなかった。
彼女らの視線が集まっている方向へ目を向けると、戦闘メイドが椅子の上に立って何やら口上を述べている。メイド達は元より、配膳係のモブ達もそちらへ意識を取られているようだ。

（ああ！　あん時のモモの演説か。あんなに齧り付きになってるあたり、マジで慕われてんだな）

丸まって不貞寝をしていた自分は兎も角、親友は確固たる地位を築けているのだと安心する。本人も乗り気なようだし、頑張って支配者を続けて頂きたいところである。
おまけに、これはヤマネにとってかなりのチャンスだ。
注目は悉く戦闘メイド――ルプスレギナに向いているし、しれーっと観客の一人として紛れ込んでしまおう。

「おぉ、モモンガ様……――ッ!?　や、ヤマ「シーッ！　静かにしな。無粋はしたくねぇからよ。適当に盛り付けてくれ。大盛りでな」」

自身の姿を認識したことで思わず声をあげかけた使用人の口を塞ぎ、上位者であることを意識しつつも可能な限り気さくな対応を心がける。
コクコクと頷く使用人の、恐縮しきりの姿に「すまんな」と苦笑。
敬愛やまぬ支配者に直々に配膳の栄誉を賜った男の使用人は、脳から煙を吹くのでは無いかと言うほどの集中力を発揮し、大皿に山盛りの、それでいて品性を失わずに食欲をそそるように美しく盛り付けを行ってくれた。

「お、お待たせ致しました！」
「おう、ありがとうよ」

重さに腕が震えるのを全霊の力で抑えつけ、神への供物の如く恭し

く捧げ持たれたそれをひょいと片手で受け取り、ヤマネはメイドたちの後方へと向かう。機嫌の良さそうなその後姿を見送ると、使用人は極度の疲労と達成感の波に飲まれ、歓喜の表情のまま崩れ落ちた。

「……やべぇ、涙出そう」

皿に盛り付けられているのは、ヤマネに合わせたのか肉類がやや多めに配置されている以外はメイドたちと同じメニューだ。ナザリックの下僕の中でも人に近い食性を持つ者たちに合わせられた一般的なもので、恐らくは本来自分達に振る舞うような食事からすれば数段劣るメニューなのだろう。

だが、ヤマネは自身の人生の中でこれ程までに美味な食事を知らない。

餌と呼称する方が正しいようなパック入りの食事を嫌い、ヤマネはできるだけ自分の手で料理を作ろうとした。

ユグドラシル以外への興味が極端に薄かった親友の為、危ない橋を渡ってまで天然食材を調達したこともあった。

上流層から出た廃棄品を横流ししたものだったが、未知の美味に彼と目を丸くしてがっついたのを覚えている。

今食べているこれらは、美化されているはずのその時の食事よりも遥かに美味なものだった。

理性ではゆっくりと噛みしめるように食べたいとは思うが、肉体はそれを拒み、次を、早く次をと急かしてくる。

結局抱えるほどの大皿に盛られた食事は数分と持たずにヤマネの胃の中に収まってしまった。

「こりゃ、アンデッドも飯を食えるようになる方法を早く探さにゃならんな。俺一人で堪能するのは勿体無いわ」

満腹とは言えないもののひとまずは人心地つき、会議までは残り三十分というところか。ちょうどいい暇つぶしだと頬杖を突きながら熱演を続けるルプスレギナを見遣る。長い赤毛に褐色の肌、演説に合わせてくるくると目まぐるしく変わる表情がなかなか面白かった。

「『――征くぞ、諸君!!』」

「お、終わったか」

途中微妙に曖昧な箇所もあれど、中断なく演説をやりきったルプスレギナ。メイドたちは興奮覚めやらぬ様子で拍手を贈り、そのまま口々にモモンガを讃え始めた。

「ああっ……！　あの威厳ある姿、比類なき魔力、尽きせぬ叡智に加えて慈愛の心まで!?　忠誠心が高まりすぎて鼻から溢れそうだわっ！」

「職務とはいえ、お側に居られるアルベド様が羨ましい……」

「あの玉体の一本一本を丁寧に拭き清める業務に従事したいんですが、どこで求人してますか？」

……忠誠心に溢れているのは結構な事であるが、何か思っていたのと違う気がする。特に最後の。

「モモンガ様も大変に魅力的であらせられるけど、ヤマネ様も素晴らしいと思うわ」

「そうね。あの荒々しさの中にも確かに光る知性の光！　理性にコントロールされた暴力の魅力というのかしら」

「あの黄金の毛並みをブラッシングする業務はいくら積めば斡旋して頂けますか？」

……最後のメイドはちょっと矯正が必要ではないだろうか。ヤマ

ネは訝しんだ。

「ルプスレギナさんはどう思う？」

「んー、そうっすねー……。御二方共に甲乙付けがたい素晴らしさだと思うっすけど、私的にはヤマネ様がヤバイっすね！　こう、雌的な意味で」

「め、メス的な意味でっ!?」

どこで覚えたのか、両手の指で卑猥なジェスチャーをするルプスレギナ。

「いやー、私もライカンスロープの端くれっすからね？　やっぱり強い雄には魅力を感じるってもんすよ！　こう、後ろから組み拉がれて、首元なんか甘噛みされちゃったりなんかしてー」

「きゃー、ルプーったらいけないこっ！」

「（・・・やべぇ）」

具体的かつ多分にエロスな要素を含むルプスレギナの妄想談話に、メイドたちの熱量が上がっていく。

そのうち騒ぎを聞きつけたメイド長あたりに鎮圧されそうではあるが、この空気は非常にまずい。

モモンガを讃えているタイミングであればヤマネもしれっと混ざる事が出来たかもしれないが、今彼女たちの話題の矛先はヤマネを向いている。この状況で自身の存在が明るみに出れば、それこそ叫喚の騒ぎとなることは想像に難くない。

程よく会議の時間も近付いている事だし、気づかれていない今のうちにヤマネは遁走を選択した。

「（と、その前に食器は片付けておかんと……）」

そのまま放置しておいても何も言われはすまい……というか「至高の御方をそのような雑事で煩わせるなど！」と使用人たちが飛んできそうではあるが、ヤマネの感覚は未だ庶民のままであった。
過激な単語を努めて聞き流し、大皿を持ったまま抜き足差し足、メイドたちの後ろを通って厨房へと向っていく。

「（置くところは……ここでいいか。んじゃ直ちに撤退を――）」
「優しくされるのもそれはそれでアリっすけど、やっぱり激しく求められるのが本懐というか、もうガッツンガッツン――」

「「あ」」

眼と眼が――合ってしまった。

猥談がヒートアップして身振り手振りを加えながら話していたルプスレギナは、陶然とした笑みのまま凍りつき、ヤマネもまた気まずさから硬直する。
永遠にも思える数秒が経過したところで周囲のメイドが異常に気がついた。

「……？　どうしたの、ルプスレギナさ――や、ヤマネ様!?」
「「!!!!」」

そこからはもう雪崩の如しだ。メイドたちは揃ってヤマネの前に跪き、ルプスレギナはその先頭で見事な土下座をかましている。ルプスレギナの表情は見えないが、見下ろすと真っ赤な耳と首筋が見えた。
同じ空間にいる主に気付きもせず、その当人をネタにした話題で勝手に盛り上がっていたのだから、下僕の視点から見れば死罪で然るべき大罪であるし。猥談に走ったルプスレギナに至っては何をか言わんやである。

その首を跳ね飛ばされるのを待つだけの罪人の心持ちで跪く彼女らだが、そんな事をヤマネに求められても困る。無駄な軋轢を防ぐためにこっそりと食事をして出ていこうとしていたのに、完全に裏目に出てしまった。

「うぅむ……」

ヤマネの一挙手一投足に注目が集まり、声を発するだけで緊張が高まるのが分かる。彼女らとて忠誠こそ極まっているが、その中身は一般人と大差の無い非戦闘員だ。そこに怯えが混じるのは致し方がない。

「（ここは……アレしかないか）……何だ。何をそう畏まってんだ？」

「は、はい！　私達はいらっしゃっていたヤマネ様に気付きもせず、よりによって至高の御方々をぐ、愚劣な思考で汚してしまいました。万死に値する愚行とに、認識しております！」

ところどころつっかえ、裏返りながらも返すメイドに、ヤマネはふぅむと首を傾げる。

「悪意からのものであれば兎も角、慕う気持ちからくるものであれば無下に切り捨てるもんでもないと思うがな」

「だ、だとしても！　耳障りな猥雑な妄想を垂れ流していた事は許されるものでは――「俺ぁな、ここ二日ほど何も喰ってなかったせいで酷く腹が減っていてよお」

宥めようとするヤマネになおも言い募るメイド、それを手で制して話を続ける。

「ちょうど昼時だったし、お前たちが寛いでいるのを邪魔するのも

悪いと思ってな。
こっそりと忍び込んだんだが……
いやあ、ここの飯が思ったよりもずっと旨くてな！　夢中で平らげちまったよ。
――そりゃあもう、周りの騒ぎなど気にならんくらいに、な？」
「あ、あぁ、ヤマネ様……」

ここまで言えば分かるだろう？　と視線で伝える。伝わって下さい。
これがヤマネの切り札「見ざる聞かざる作戦」だった。
『何をやっていたかなんて自分は見ていないし聞いていないから罰しようがありませんよー』という訳である。

「……まあ、お前たちが自分たちの行動を反省しているというなら、騒がしくしていたことをメイド長にでも伝えて説教でも喰らってくるがいいさ。おれからお前たちに与える罰なんぞないからな」

メイド長と言えばあの犬顔の物体Xだ。ナザリックでも屈指の良識を持ったキャラの筈なので、きっと何とか丸く収めてくれるだろう。これまた丸投げである。
感極まったまま頭を下げ続けるメイドたちにひらひらと手を振り、そそくさと食堂を後にする。
会議の時間まではあと１０分。
かくして、ヤマネの濃密に過ぎる昼休みの時間は終わりを告げたのだった。

「ただいまー」
「お、お帰り。何してたんだ？」
「メシ喰ってた。やべぇぞアレ、美味すぎて泣くかと思った」
「マジか、いいなー……俺も後で飲食可能になるアイテム探そうか

な？」

そんな会話をしながら会議室で守護者たちの入室を待つ。

きっちり開始時刻五分前にノックの音が鳴り、メイドが守護者達の到着を告げた。

「――至高の御方々のご召喚に従い、我ら守護者一堂、罷り越してございます」

「うむ、ご苦労。それぞれ席に掛けるがよい」

ナザリックにおける最高権力者はギルド長であるモモンガ。ヤマネはあくまでも一ギルドメンバーであり、方針の決定権はモモンガにあると予め宣言していた。よってこういった場での議長はモモンガが務める事となる。

本人がノリノリでＲＰをやりたがったせいでもあるし、ヤマネ自身もあまり格式張った振る舞いは得意でないため、体よく押し付けることにした。いわゆるＷｉｎ―Ｗｉｎの関係だ、きっと。

デミウルゴスを始めとした守護者達の報告は恙無く進んだ。

ナザリックの知略担当上位三名のうち二名、加えて探索担当と群使役担当がその力を尽くした周辺探索は驚きの進捗を見せており、ゲーム感覚でわちゃわちゃと検証を進めていた上位者二名に罪悪感を抱かせるほどだ。

手元に置かれた周辺地域の地図を見ながら、モモンガがほっと一息をついた。

「――ふむ。これを見るに、やはり我々はユグドラシルとは別の世界に転移した、と想定した方が良さそうだな。

探索した範囲内で観測された者は最高でも戦闘メイドと同程度、守護者クラスの実力者は皆無か。

ひとまずはナザリック存亡の危機、という状況は脱していると見え

る。……まぁ些か拍子抜けではあるが」

「初っ端から死にまくって覚えろみたいな世界よりはマシだろ。それよか、いかにもファンタジー！　って感じの世界観が出来上がってたのにびっくりだ」

確かに、とモモンガが頷く。

確認されているだけでもゴブリン・オーガ・エルフ・ドワーフなど、誰もが知っているようなポピュラーなファンタジーの種族が実際に存在している世界があった、というのは驚きだ。或いは自身の世界にもこの世界へ転移、或いはこの世界から転移して来た者がいたのかも知れない。

が、それはひとまず置いておこう。まずは目の前の報告書だ。

「……リ・エスティーゼ王国にバハルス帝国、それとスレイン法国か。先の二国に関しては大したことはないという調査結果が出ているが、この法国についての要調査というのはなんだ？」

「はっ、仰せの通りに隠密性の高いシモベを使ったところ、他の二国については問題なく調査を進められたのですが、かの国にて調査中の一匹が音信を絶ちました。何者かに隠密を見破られ、排除されたと思われます」

デミウルゴスの言葉に、それまでのどこかリラックスした雰囲気が一転、ぴしりと空気が張り詰める。

「ふむ……調査に使っていたのはどのモンスターだ？」

「替えの利く者を使うようにとの事でしたので、コキュートスから借り受けた八肢刀（エイトエッジ・アサシン）の暗殺蟲の下位種族でございます。定期報告としてメッセージを受けた直後に応答が途絶えました」

とするとレベルは４０弱。隠密性に特化したシモベの存在を察知

し、なおかつ逃走を許さずに倒すのなら、同クラスのパーティか、二回りはレベルが上の相手でないと難しかろう。或いは、何か未知の特殊能力があるか。

「加えて、最後の通信内容がこれ、か」

手元の資料には、他の兵士達とは一風変わった服装の特殊部隊が存在するらしい、という報告が挙げられていた。先の情報と合わせて考えれば、他のプレイヤーがもし転移している場合の最有力候補は法国となるだろう。

「では、目下のところはスレイン法国を主な諜報先として調査を進めよ。隠密能力の高い者を使うのもそうだが、警戒を抱かせにくい小型の者を動員するのも良いな」

「はい、仰せのままに」

うむうむと頷くモモンガ。その詳細が解らずとも、油断ができない相手であると分かったのならそれもまた収穫だ。この世界を冒険するにあたって根城となるナザリックの安全は是が否にでも確保しておきたい。

「……ともあれ、具体的な計画を練ったアルベドとデミウルゴスは言うに及ばず、

シモベを駆使して広範囲の探索を担ったアウラ、ナザリックの偽装を担当したマーレ。

デミウルゴスの要請に応えて適切なシモベを派遣したコキュートス。

探索にかかりきりの守護者達の穴を埋めて、ナザリック内の把握と警護に務めたセバス、シャルティア。

そして実働として探索に関わったシモベ達も含め、素晴らしい功績だと称しよう。

お前たち、見事に私の期待以上の成果を上げてくれたな」

「「は、はいっ！」」

「あ、あああありがたき幸せに存じんす！」

「御方ノタメトアラバ、如何ナル困難、難局モ踏破シテミセマショウ！」

「……そのお言葉だけで報われる思いです」

総括として守護者たちを褒めるモモンガ。その声は明るく機嫌の良さが伺えるものであったため、守護者達も相好を崩して思い思いの礼を尽くした。

みな心なしか肩の力が抜け、緊張が解れた様子を見て理解した。

彼らも不安だったのだ。殆どの創造主に去られ、残った主たちに愛想を尽かされはしまいかと。

「うむうむ。……お？　これはこの辺りの地形図か」

「はい。ニグレドの尽力で高精度の地図が作成出来ましたので、差し当たっての現状把握の補助にと」

「西にでかい森、北に山脈。東南方向にちっさい村が幾つか、ってとこか。土地が有り余ってるなあ」

ヤマネがこぼした感想は如何にもあの時代の人間らしいものだった。世界の殆どが汚染により人間の生存が困難となり、極々限られた領域でひしめき合って暮らしてきた事を思えば、確かにと肯かざるをえない。

どれ、覗いてみようかとヤマネが言い出し、セバスが遠隔視の鏡を持ってきた。

「どーれどれ……」

ゲーム時代と仕様は変わっているが、先の検証作業中に操作方法は

分かっている。鏡をタブレットの要領で操作しながら適当な村にフォーカスする。

「……んー？　何か慌ただしいな」
「火も見えるな。祭りか何かか？」
「いえ、これは……」

セバスがそういった瞬間、画面の端で朱が散った。
祭り――ある意味ではそうかも知れない。その主役はこの村の本来の住人ではなく、彼らを追い立てている騎士達であるようだが。
彼らは逃げ惑う村人達を馬で追い、家々に火を放ち、そしてその背に刃を突き立てる。

「斥候として放っているシモベ達によりますと、法国の部隊が帝国の騎士の偽装をして王国との離間工作を行っているようです。
兵の質は低く、殆どが吹けば飛ぶような者のようですが、村人を甚振るには十分なようですね」

額に深い皺を刻んだセバスとは対象的に、デミウルゴスが笑顔を崩さないまま報告をする。
設定的にも悪魔らしい悪魔である彼にとっては人同士の醜い争いなど大好物以外の何物でもないのだろう。
見ればシャルティアは面白そうに鏡を覗いているし、闇妖精の姉はその姿にうんざりとした様子だ。
コキュートスは弱者を甚振るという行為に不快感があるのか、押し黙ったまま腕を組んでいる。

そこまで観察したところで、モモンガは自身が驚くほど冷静に現状を見ている事に気付いた。
人間が同じ人間に悪意を持って傷つけられ、殺されている。本来であれば大きなショックを受ける光景を目の当たりにしているにも関

わらず、だ。
自分でも驚くほどに、人類に対しての共感を感じない。せいぜいが虫に人が抱くそれ程度のものだ。
恐らくはアンデッドの身体となったことと無関係ではあるまい。
だが、あることに思い至った瞬間、無いはずの心臓を掴み上げられるような感覚を覚えた。

――ヤマネは、どうだ？

ユグドラシルプレイヤーとしてのヤマネのカルマ値は悪寄りの中立だが、山根敏之の性質はどうかと問われれば、多少荒っぽいところはあれど紛れもなく善性だと断言できる。
元々は中流家庭の生まれでありながら学校の苛めグループに反発し、大喧嘩の末に勘当を受けた身の上であり、その経緯から反権力のウルベルトとも、勧善懲悪を旨とするたっち・みーとも馬が合った。おかげで彼らが喧嘩になりそうな時には、彼と自分が仲裁役となるのが常だったものだ。
モモンガと同じように異形種へ変わったことで人間に対する共感性は――犬猫に対して感じるそれ程度には――薄くなっているだろうが、そんな事は大した影響は無いだろう。根本的にお人好しでお節介焼きなのだ。自身に15年以上も関わり続けている事がそれを如実に表している。
ちらりと見れば、片目を糸のように細めたヤマネの顔。腕を組みながら頻りに人差し指で腕を叩いているその仕草は、紛れもなくヤマネが苛立っている時のそれだった。

（そうだ、こいつはこういう奴だった……）

付き合いの差か、守護者たちはまだ彼の様子に気付いてはいない。だが雰囲気の僅かな変化を敏感に感じ取ったのか、マーレなどはきょ

ろきょろと辺りを見ながら腕を擦っている。
ナザリックを構成する者達はモモンガを含めてカルマが悪に偏った者が殆どであり、セバスなどは僅かな例外だ。
確固とした信頼関係を築けていない状態で守護者たちとの関係に溝が出来てしまうのは問題であるし、何よりこのまま放置していたら我慢し切れなくなったヤマネが件の狼藉者達を蹴散らしに飛び出して行きかねない。
そうなれば法国との対立、最悪はプレイヤーとの全面戦争だ。洒落にならない。

（考えろ、考えるんだ俺……！　ヤマネを巧く宥めて俺達の立場も損ねない、丸く収まる方法を……っ！）

幸い、先程から精神の沈静化が度々発生してくれるおかげで思考はクリアな状態を保てていた。
鏡の向こうではやりたい放題の賊達。ヤマネも抑えてはいるのだろうが、そろそろ限界だろう。シャルティアなどは興に乗って応援まで始めているから、爆発した際には真っ先に彼女の頭に拳骨が落ちる事は間違いない。

ヤマネからパチパチと放電の音が聞こえ始め、黄金の鬣が浮き上がる。もう限界だ――！

「（ええい、ままよ！）……デミウルゴス。彼奴らの戦力分析は済んでいるか？」
「はっ、今映っている陽動部隊と、誘き寄せられた王国の戦士長を狙う実働部隊が確認されておりますが、いずれも雑兵程度の者たちです」

――よし！　まずは第一の関門は突破だ。内心でガッツポーズを取る。

「なぁ、シャルティアよ。戯れに問うが、良いか」
「？　はいっ、我が君！　何なりとお尋ねくださいましっ」

「……先に宣言したように、我々は冒険者だ。よってこのナザリックから、遠からず冒険に踏み出していく事になる。
そこで、考えてみよ。
これから我らが通るかも知れない道を、訪れるかもしれない場所を、かの如く好きに蹂躙させておいて良いものかな？
食べてみねば解らぬが、極上の味かもしれぬ果実をいざ囓ろうとしてみれば、横から果実に砂を投げ掛けられた。
その時お前はどうする？」

「それはもう、生まれてきた事を後悔させてから殺しんす！　……あっ」

そこでようやくモモンガの意図に気付いたのか、はしゃいでいた己を思い出しシャルティアが小さくなった。

「そういうことだ。おかげで先程からヤマネの機嫌が悪くてかなわん。
……だが、相手は先程要注意と定めたばかりの法国の手の者だ。慎重に事に当たらねばならん」

自身らの思慮の足りなさが主達の不興を買っていたと知り守護者達が顔色を失うが、モモンガは何となくそれっぽい言葉を選び、うまく組み合わせながら畳み掛けていく。

「さりとて鼻先をチョロチョロと蝿が飛び回るのをそのままにしておくのも業腹というもの。
……少し予定を繰り上げる事になるやもしれんな。

この件については追って指示を出すこととしよう。彼奴らには気付かれぬよう監視を付けておけ。
――では、報告会はこれで解散とする。次の命が下りるまで、各々英気を養っておくといい」

恭しく頭を垂れる守護者たちに見送られ会議室を出ると、ヤマネは苛立ちが収まらないのか「寝る」と一言残して自室へと戻っていった。

さて、目出度く難局を乗り切り時間的猶予を獲得したモモンガだが、転移以来――いや、人生でも初めての危機に内心で盛大に頭を抱えていた。

「……ヤバい、どうしよう」

ただの人間の心がカルマ極悪のアンデッドの器に押し込められ、変調を来さない保障はどこにもない。
モモンガとしてではなく鈴木悟として、人間性を取り戻す術を早急に見つける必要があった。

ダブルライフ

カッツェ平野。

リ・エスティーゼ王国、バハルス帝国、スレイン法国の中間に位置し、しばしば行われる王国と帝国の小競り合いにおいて定番の主戦場として扱われていた。

これまでの歴史の中であまりに多くの血を吸ってきたためか、一年中立ち込める薄い霧の中では絶えずアンデッドが生み出されており、いざ両国の戦争が起きるというその時にのみ、霧は晴れ渡る。

まるで、同輩を歓迎するかのように。

幾度の戦争を越え、夥しい血を啜ってきたカッツェ平野であるが、この日はそれまでに倍する量の膨大な血を、その身に浴びることとなった。

ふらりと現れた、たった一体のアンデッドによって。

西にリ・エスティーゼ軍。東にバハルス帝国軍。両軍合わせて３５万の兵が会したこの合戦において勝利を収めたのは、僅か数名。

それも王国と帝国のどちらでもない第三軍であった。

一触即発、いざ両軍の衝突が始まるその瞬間に空中に現れた、巨大な光り輝く魔法陣。その中心には豪奢なローブを纏ったアンデッドが一体。

両脇を赤と白の悪魔に護られたアンデッドは、困惑する兵たちの矢礫や魔法を意にも介さず詠唱を続ける。

不意に陣中に風が吹く。

草葉一つ揺らさぬそれは、だが確かに兵たちに忍び寄り、その魂を抜き取った。

両軍を合わせ１０万の命が音も無く奪い去られ、理不尽な戦友たちの死に兵達は混乱を極める。

上に立つ者達はあまりの想定外に兵を一旦退こうとするが、全ては遅きに失していた。

アンデッドの隣に浮く、漆黒の珠。
最初は見えないほどの大きさだったそれは、兵たちの命を、困惑を、絶望を吸っているかのように肥大化を続け、遂には太陽を隠すような巨大なものへと変貌を遂げる。

そして――――絶望が産み落とされた。

可愛らしさすら感じる仔山羊の声が戦場に響き渡る。
数多の犠牲者が奏でる、絶望の叫喚と一緒に。

四匹の仔山羊が縦横無尽に戦場を駆け回り、哀れなヒトを蹂躙していく。
残る一匹の仔山羊の背で寛ぎながら、アンデッドはその様を眺める。地獄と化した戦場の中で、骨の両手を叩くカチ、カチという音が響いた。

「は、は、は。これは凄い。仔山羊の五体同時召喚など、あの世界でも見たことはなかったぞ」
「おめでとうございます！　■■■■様」
「魔の王たるに相応しいそのお力。間近で拝見する僥倖に随喜するばかりにございます」

ここには居らぬ友にも見せてやりたかった、と零すアンデッドの声色からは無邪気な喜びの色。
両脇に控える悪魔たちも眼前の地獄絵図を満面の笑顔で眺めながら、はしゃぐ主を褒め称える。

「しかし、あやつは一体何をしているのか。
勝手に出歩くのは何時もの事としても、行き先と期間くらいは残していけというのに。
全く、仕様の無いやつだ」

愚痴るアンデッドだが、その言葉に険はない。『あやつ』の事を心から信頼し、親しみを感じている事が伺えた。

「まあ、良い。此度の事はあやつが還った時にでも聞かせてやると――ん？」

ぱぁん、と音を立てて、一匹の仔山羊の頭が爆散した。

三体が音の方向を向くと、その先に立っていたのは一人の威丈夫だ。

小脇に何やら薄汚れた襤褸のような物を抱え、たった今仔山羊を屠殺した右腕はどす黒い血に塗れている。

男にしては長い黒髪は顔を半分隠し、その表情は窺い知れない。

「ああ、■■■！　お前も来ていたのか」

自らが生み出した存在を目の前で無残に殺されたにも関わらず、アンデッドの声は非常に弾んだものであった。それも当然だ。彼からすれば、弾け飛んだ仔山羊などただの魔法の副産物であり、時間が経てば消えて無くなる消耗品でしかない。それよりも目の前の男の方が万倍大事である。と、彼の浮き立った声がそう示している。

両隣の悪魔も笑顔のままに、隣の主へそうするのと同様、丁重な礼の形を取っていた。

だが、男は俯いたまま、黙して語ることはない。

それに気付かず、アンデッドは尚も言葉を連ねた。

「見ろ、彼らの兵たちを１０万ばかり餌にしてみたら、五匹も仔山羊が産まれたぞ！

一度にこれ程の数を召喚出来たのは、私が初めてじゃないか？

……おい、どうした？」

語りかけるアンデッドだが、俯いたままの男の姿に流石に違和感を覚えたのか、男を案じる言葉を投げ掛ける。
その声色からは明らかに心配の色が伺える。心から、相手の事を案じているのだ。

「……どうした、か。それも分かんなくなっちまったか。■■よう」

どさり、と男が抱えていた襤褸を落とす。血と泥で汚れたそれに包まれて、歪に曲がった腕が見えた。

「？　なんだ、兵に知り合いでも混じっていたか？　ならばメイド長に――「■■よおッ!!」

――蘇生させれば、という言葉は男の叫びに掻き消された。
両脇の悪魔たちも困惑した雰囲気を隠せない。男が何に激昂しているのか理解が出来ないからだ。
アンデッドも男の豹変に首を傾げるが、それでも対応は変わらない。相手は親友なのだ。

「――なあ、■■よう。俺達はさ、勘違いしてたんだよ」
「……勘違い？」
「ああ、そうだ。俺達はさ、あの世界から力と見た目だけを持たされてこの世界に転がり込んだ、ただの元サラリーマンだってさ。ずっとそう思ってた。
――でもな、違ったんだよ」

違う？　何が違うと言うのだろう。
男の言うとおり、自分と彼はここではない世界からそれぞれアンデッドと妖の身体を得てこの世界へと流れ着いた。元々はただのニンゲンであり、友人同士だった。そこに認識の齟齬は無い――筈だ。

だが、男は悲しそうに眉を顰めると首を振る。

「違う、違うんだよ。■■。
俺も、お前も。二人の記憶を持っているだけ。それだけの、ただの化け物なんだ」

くしゃくしゃに歪んだ顔を両手で覆う。その様はまるで泣き崩れているようにも見え、さりとて涙は一滴とて流れはしない。
丸められた背中がわなわなと震えると、身体が爆発的に膨れ上がる。本来の姿である黄金の獣に戻ったのだ。

「……俺は、ずっとその現実から目を逸らしてたんだよな。
ここに来る前がそうだったみたいに、ずっとお前と俺とで一緒に馬鹿やって、冒険して、笑い合えるもんだと思いたかった」
「何を――言っているんだ？」

分からない。
彼の言っていることが理解できない。

「お前は、私の友だろう？　たかだか器が違うだけで、そこに何の違いがあるというのだ」
「それが分からないから、化け物だと言うんだよ。
――でもな、俺はお前と違って半端だからさ。辛いんだよ。
ヒトだった頃の残り滓が、違う、そうじゃないって騒ぎ立てる。完全な化け物にも成り切れない」

だから――

「さよならだ……■■■。
俺にはお前たちを止める程の力はない。かと言ってダチを殺せるほどの覚悟もない。

でも、ヒトを忘れてしまった、ただのアンデッドのお前をこれ以上見ていることはできない」

そう言うと男は踵を返し、ゆっくりと宙へ浮かぶ。
彼の飛行の速度は仲間の中でもトップクラスだった。
本気で飛んで逃げられてしまえば、今の彼の配下では追うのは困難を極めるだろう。
それだけはさせられない。離反の意思を持ったまま、彼を行かせてしまったら――

「ま、待て！　待ってくれ■■■！
――いや、■■■■！」

アンデッドは必死だった。
自分に何か非があったのであれば改善しよう。詫びろと言うのであればこの頭を深く下げ、泥にだって擦り付けよう。
お前こそはたった一人だけ、たったひとりだけ自分と一緒にいてくれた、唯一の友なのだ。
莫逆の、友なのだ。

だから――行かないでくれ！

「……不義理な親友の頼み事を、もし聞いてくれるなら。■■■よう」
「な、何だ！　何でも言ってみろ！　だから――」

「俺を、追わないでくれ」

金色の獣は飛び去り、後には哀れな屍の王だけが残った。

配下の悪魔が口々に何かを言っているが、彼の耳には届かない。

何故、何故、何故――？

空っぽの頭蓋の中で、疑問の言葉だけが木霊する。

万の下僕を従える権力も
十万の命を一吹きで消し飛ばせる無比の魔力も
百万の時を経て朽ちる事のない不死の身体も
一瞬で全てが空虚と化してしまった。

心を閉じた彼の心には、もう何も届かない。
何も。

何も……

「あ、あわわわわわ……」

自室で現状を打破すべく考えを練っていたモモンガだが、一時間が経っても打開案は浮かばなかった。

それどころか己の脳裏に過ぎった、考えうる限り最悪の未来予想図。

根本的なスペックが上がっているためか、それは驚くほどの鮮明さを持って彼の心を打ち据えた。

アンデッドの特性である精神沈静化がひっきりなしに発動し、視界を緑に染めているがまるで効果はない。

転移したての今だからこそ、鈴木悟としての記憶と思考を保ったまま客観的に物事を見られるし、人間だった時の自身であればどのよう

に行動するかをシミュレートする事もできる。
だが、アンデッドとなり人との共感性を失ったことは先の一件で明らかであるし、人であった時の記憶が薄れれば薄れるほどに彼の思考はアンデッドのそれに近付いていくだろう。ただの悲観的な妄想と切って捨てることはできなかった。

「か、考えろ鈴木悟。どうすればいい、どうすれば……」

友に見捨てられ、たった一人で永遠の時間を過ごすなど悪夢でしかない。
自分を慕ってくれている下僕たちはもちろん大切な存在と言えるが、彼らはあくまで仲間の子供のように捉えているモモンガにとっては、やはり第一はヤマネだ。どうにかして価値観を彼と共有しなければ。
混乱したまま闇雲にインベントリを開けたり閉じたりしていると、一つのアイテムが彼の目に留まった。

（あ――!?　こ、これだッ！）

希望を見出したモモンガは、すぐにメッセージを起動し、友へと繋いだ。

「……ああ、ヤマネか？　ちょっと急ぎ頼みたいことがあるんだが、俺の部屋まで来てもらっていいか？」

実行するのは出来るだけ早いほうがいい。彼との溝が生まれる前に、一刻でも早く。

「おーう、来たぞー」

「ああ、悪いな。寝てるとこ起こして」

ふぁー……と、金の鬣をポリポリと掻きながら欠伸をするヤマネ。一寝入りして整理がついたのか、先程までの張り詰めた雰囲気は鳴りを潜めていた。

「いんや、二度寝しようか迷ってたところだったからちょうどいいさ。んで、どうした？」

「ああ、それなんだけどさ、

――人化のスキルを手に入れようと思うんだ」

は？　とヤマネが首を傾げる。

「人化のスキル……って、オーバーロードってそんな事できたか？」

「出来ないさ。手に入れるって言ったろ？　これを使うんだ」

そう言って右手の人差指を立てて見せる。そこには四角い台座に3つの流れ星を象った指輪が光っていた。

流れ星の指輪。超位魔法〈星に願いを（ウィッシュ・アポン・ア・スター）〉を三度まで代償無しに使用できる、超が二つ付く程のレアアイテムだ。

ヤマネが訪れる前に予め実験をして〈星に願いを（ウィッシュ・アポン・ア・スター）〉の効果が選択式ではなく任意の願いを叶えるシステムへ置換されている事を確認していたモモンガは、この指輪の力であれば人化のスキルも取得できると踏んでいた。

「あー……思い出したぞ。お前がムキになってガチャに有り金突っ込んで、しばらく俺んちでメシを食ってた時のアレな」

「あ、はい。その節は大変お世話になりました……」

かつて鈴木悟はこのアイテムが当たるガチャイベントであまりの運の無さにヤケを起こし、ン十万の資金を投入した事がある。

どうにか目的のアイテムは手に入ったものの、安価な筈の合成食すら買えずに日に日にやつれて行く彼を不思議に思い、ヤマネが事情を聞き出したのだ。
その結果、彼には給料日までの食事と、特大のたん瘤が与えられた。

「まぁいいや。それで？　何で急にそんな事になったんだ」

「……ゲーム内のアバターが自分の身体になってから、色んな検証をしただろ？
魔法の使い方とか、状態異常耐性スキルの効果とかさ。
最初は動揺が抑えられて助かるとは思ったけど、さっきの鏡で実感したんだ。
俺は人間を同種と思えなくなってる。
……お前もそうなんじゃないか？　ヤマネ」

「――ッ！」

ヤマネが息を飲み、その眉根に力が篭もる。
元々情の深い男だから自分ほどではないだろうが、彼も薄々は感じていたのだろう。

「人が死んでも、虫同士の争いを見てるみたいだった。アンデッドと人間の違いを痛いくらいに感じたよ。
だから――まだ俺がそれを自覚できてるうちに。死の支配者（オーバーロード）のモモンガじゃなくて、鈴木悟として。
人として思考ができる内に、手を打っておかないと」

「……ああ、確かになぁ。人化した時に感じた妙な違和感もそのせいか。腑に落ちたわ」

ヤマネの言葉に頷く。やはり思考も肉体の性質に引っ張られる傾

向があるらしい。
　せっかく貴重なアイテムを使って得る人化が無駄に終わっては困ってしまうからひと安心だ。

「ああ。それでここからが本題なんだが……」
「あん？　今のが本題じゃなかったのか？」
「いや……関連はしてるんだが、こっちが頼みたい事になる」
「……分かった。聞こうじゃないか」

少し言い出しづらそうに口ごもるモモンガに重要性を悟ったヤマネ。居住まいを正して次の言葉を待った。

「その……、人化後のデザインを、どうしよっかなー、と」

「……は？」

何だ、今目の前の骨はなんと言ったのだ。でざいん？

「あ、いや、俺って割とデザインとかそっち系のセンス無いだろ？　長く付き合ってく身体だから、作って後悔するような事はしたくないじゃないか。
　シモベ達にも舐められないような、良い感じのアバターを作りたいから、その、だから、な？」

焦ったようなモモンガの弁明が、次第にもごもごと小さくなっていく。
　それは照れからのものか、それとも
言葉を重ねる毎に圧力を増す、目の前の金色の獣からの怒気に中てられてのものか。

「……っ構えて損したわっ！　ど阿呆！」
「ふぐぁっ!?」

１００％近接ビルドのデコピンは恐ろしく痛かった。

シモベ達に再び招集が掛かったのは、それから更に二時間後。
法国への対処についての通達があると告げられたが、今回の会場は会議室ではなくモモンガの自室だ。

「お、来たな。まぁ入れ」
「こ、これはヤマネ様！　御方自らのお出迎えなど――」
「ああ、メイドは今忙しくてな。まあ気にすんな」

ドアが開いたと思えば、目の前には人に化けたヤマネの顔。
どこの世界に部下の応対を主に任せるメイドがいるのか、とか。
そもそもそこまでせざるを得ない役目とは何なのか、とか。
一律に困惑を顔に貼り付けた守護者達一堂だが、応接室に入った瞬間にその感情はピークへ達する。

「……ん、もが、んぐっ」
「「「も、モモンガ様っ!?」」」

そこには、口いっぱいにハンバーガーを頬張る、ナザリックの最高権力者――と同じローブを着た人間がいた。

ヤマネの顔がインド系とすれば、彼の顔はアジア系。
短めの焦茶色の髪を後ろに流して撫で付けた、俗にオールバックと呼ばれる髪型。

やや目尻の下がった眼差しは温和そうな印象を与えるが、吊り上がった眉根は意志の強さを感じさせた。
鈴木悟の顔の造作を整えた物をベースにしたその造形は『美形すぎるのも恥ずかしいが、地味すぎるのも威厳に欠ける』と我儘を言うモモンガの要望を満たすべく、二人で要素を足していった結果である。
モモンガの羨望故か――それとも嫉妬故か。その顔立ちは美形であったたっち・みーの現実（リアル）の顔にもどこか似ていた。

「むぐ、んぐ……ふぅ。
――ああ、済まんなお前たち。呼びつけておいてみっともない姿を見せた」

「い、いえ。とんでもない事です。しかしモモンガ様、その御姿は……」

「うむ。それを語るには私達という存在の根本的なところから語る必要があるのだが
――お前達は、私やヤマネのような『プレイヤー』と呼ばれる者達が
『リアル』と呼ばれる高次元に住まう存在だと言うことは認識しているか？」

皆が頷く。ＮＰＣ達の近くでしていた会話の内容も憶えていたことから、それらから推察したのだろう。
流石にナザリックも含め全てがゲーム内のデータだとは認識していないだろうが。

「そして、私達プレイヤーはどのような姿を取っていても、その姿はこの世界に映された影でしかない。
リアルにある本来の身体はいわゆる『人間』と呼ばれる種族のそ

れと酷似しているのだ。
……だが、根は同じにも関わらず、あの世界では異形種に対する迫害が横行した。
迫害者達に対抗するため、自助組織として手を取り合った異形種達。それが我ら(ギルド)の始まりだ」

下僕達の言葉はない。
主が語る創生の秘話に誰もが胸襟を正し、主の次の言葉を待つ。

「だが、ユグドラシルからの転移によって化身(アバター)と正体との繋がりが断たれてしまった。
これまでは遠隔的に操作していた身体を、これからは自身の肉体として操らねばならなくなってしまったのだ。
……元の肉体に大した思い入れは無いが、やはり人の身体とアンデッドの身体では齟齬が大きい。
最悪の場合、精神に変調を来す可能性もあることが先程の報告会で判明したのでな。
既に人化の法を持つヤマネに手伝ってもらい、私も会得してみた、という訳だ」

「つっても、俺が手伝ったのなんて顔の造作のアドバイスくらいだけどな。
感覚的に使ってるもんを教えろと言われても困るし」

「「お、おぉぉ……!」」

なんと――!
ギルドの長であるモモンガの大事は、それ即ちナザリック全体の大事でもある。
至高の御方々はまたもやナザリックの危機を人知れず退けていたというのか。

「お前達には事後通達となってしまい済まなかったが、今回はあくまで片手間で済む事だったからな。
決して諸君らを軽んじている訳では無いことは理解してほしい。
無論、今までの姿も――――この通りだ」

モモンガが己を隠すように両腕を交差させ、目の前で開く。
すると、そこにはいつも通り、死の支配者（オーバーロード）の姿のモモンガが現れた。
後方でホッと安心したような息が漏れたのは、屍体愛好家のシャルティアのものか。
再び人の姿に戻ったモモンガがハンバーガーを一齧り。

「どちらの姿にも利点があり、不利点がある。今後は使い分けていく形になるだろう。
……こんな風に、料理長の作った絶品料理を堪能できるのもこの身体の利点だな」

いずれお前たちと酒でも酌み交わしたいところだ。とおどけたように笑う。
気付けば守護者達の表情からは戸惑いが消え、いつも通り――――いや、それ以上の崇敬の気持ちが見て取れた。

「（よしっ……！　守護者たちからの悪感情は無いみたいだな。作戦は成功だ）」

何せ一部を除けば殆どが〈カルマ：悪〉の異形種ギルドである。主が人間種の姿を取ることで反感を買うかもしれないと内心戦々恐々であったが
モモンガの事実を交えた誠意ある説明によって結束は深まった事だろう。多分。

――いや、一人だけモモンガから目を逸らし俯いたままの者がいる。

「……どうした、アルベド。この姿は不満か？」

「……い、いえ……」

その返事にはいつものような明瞭さはない。

守護者の中でも特にアルベドは人間種に対する蔑視が強い傾向にある。

忠誠心も一際強い筈だが、そういった感情が内心せめぎ合っているのだろうか。

「どうした？　言ってみよ。他ならぬお前たちからの言葉であれば決して無下にはしない。

どのようなものであれ真摯に受け止めようとも」

「は、はい……

ええと……そ、そのっ、胸元が……」

「胸元？」

「そっ、そのように胸元の開いた御姿はっ、あ、ああアルベドには少々刺激が強すぎますっ！

どうか、どうかお身体をお隠し下さいませ！」

顔を真赤にして、振り絞るように上げられた言葉が場の空気をかき回す。

……は？

言われてモモンガは自身の胸元に目を落とす。

成る程。アンデッド時代は特に気にもしていなかったが、人の姿となればまた事情が変わってくる。
胸元を晒し鳩尾の紅玉まで晒すローブ姿は、確かに少々露出が激しいかもしれない。

「あー……済まなかったな、アルベド。淑女の前でこの格好は、確かに些か配慮を欠いていたようだ」
「い、いえっ……私こそ、分際を弁えず差し出がましい事を……」

「……あー、お二人さん。とりあえず丸く収まったわけだし、本題に入ろうや」

見合いの席のようにぺこぺこと謝り合う二人だったが、ヤマネの指摘で我に返った。
人の姿を取っている時のモモンガには精神沈静化のスキルが働かないため、予想外の出来事には素が出やすいという弊害がある。
気を取り直したモモンガ。「んゞンッ！」と咳払いを一つ、改めて姿勢を正して下僕達に向き直る。

「それでは、この件についてはひとまずこれまでとし、改めて本題に入るとしよう。
件の無作法者への仕置きと、ナザリックの短期方針についてだ。

――まず、私は今後対外的には『アインズ・ウール・ゴウン』を名乗ることにした。
今後は少なくともナザリック外で私を呼ぶ際は『アインズ』と呼ぶことを命ずる」

閑話　その後のシモベ達

「――いやはや……かの御方はいつも私達を驚かせてくださる。まさか、あのような事が可能だとはね」

モモンガの部屋を辞して暫し。九階層の廊下を歩きながらデミウルゴスが口火を切った。

「ええ、そうね……。守護者統括として至高の御方々に恥じぬ働きを。

そうあろうと心がけ、努めているつもりではあるけれど……正直、心配になってきたわ」

「ね！　だから言ったでしょ？　モモンガ様は超アンデッドか、神アンデッドなんだって！

ただのアンデッドにあんな事が出来るわけないじゃない！」

「う、うんっ。すごかったね、お姉ちゃん」

「考案サレタ策モ大胆ニシテ的確。流石ハ御方ト言ワザルヲ得ナイモノダッタ」

モモンガの部屋を辞した守護者達が口々に彼の凄さを称えている。

それも宜なるかな。アンデッドは本来死した者達。たとえ肉の器を得たとしても死者は死者だ。

それが件の御方はどうか？

ものの一刻で己に迫った危機に対応し、肉の器ではなく「生ある身体」を手に入れてしまった。

規格外にも程があるというものだ。

「しかしアルベド、あれは無いと思いんすえ？」

「な、何かしら？」

「すっとぼけなんし！

なーにが「そのような胸元の開いた御姿は刺激が強すぎますぅ」でありんすか！
ぬしはサキュバス。性欲の権化でありんしょうが！」

「あまりの白々しさに鳥肌を抑えるのが大変でありんしたわ！」と憤慨するシャルティア。
おろおろと助けを求めるように守護者達を見回すアルベドだが、揃って視線を逸らされてしまった。
うわキツ、と思っていたのは彼女だけでは無かったのだろう。

「し、仕方ないじゃない！
私はサキュバスとしてタブラ・スマラグディナ様に創り出されたけれど、
ヤマネ様より『清純たれ』とも望まれているんだから！」

そう、ヤマネが設定した未通女という設定は転移後も活かされている。
その結果アルベドは「淫魔で処女で初心」という、何ともペロロン的な頭の悪いキャラクターである事を強いられているのだ。
そして至高の御方がそうあれと定めたのであれば、下僕達がそれを詰ることは不敬でしかない。
シャルティアは己の奥底より湧き上がる形容困難な気持ちをぐぬぬと押し殺す事となった。

「まぁしかし、御方が新たな力を手に入れられたことはナザリック全体にとっても僥倖と言うべきだね。
これは本当に素晴らしいことだよ！」
「ム、ドウイウコトダ？　デミウルゴス」
「なに、簡単なことさ。
――君たち、モモンガ様とヤマネ様のご子息、ご息女にもその忠義を尽くしたいとは思わないかね？」

その発言に誰もが目を剥いた。

「モモンガ様とヤマネ様は至高の御方々の中で最後まで我らと共に在ろうと仰ってくださった

慈悲深き方々だ。もちろん、私だってその御心に全力で報いたいと思うよ？

しかし、かの方々は余りにも高みに在している。

慈悲に縋るだけで満足に御方の為に尽くせていない、

そう気に病む者も多いのではないかと思うんだ。

もし我らの中で御方のお眼鏡に適う者がいて、その貴き血をお残しになられたら。

将来的に御方々の血を引く支配者階級と、ナザリックの下僕たち奉仕階級が生まれる事になる。

そうなれば御方々の慈悲に甘えるだけだった弱きモノ達も、御方の為に尽くす機会が増えるんじゃないかな」

デミウルゴスはその素晴らしき未来を想像する。

至高の御方の指揮のもと、御子達がそれぞれの階層の主となり、階層守護者はその補佐として仕える。

いざ遠征となれば、各々が一軍を率いて万象を蹴散らして征くのだ。

聡明な御方であれば、自身に思いつく程度の事は織り込み済みで事を運んでいても何も不思議はない。

「フム……成ル程ナ。ソレハ確カニ素晴ラシイ事ダ。

――オオ、坊チャマ！　爺ハ、爺ハココニオリマスルゾ……！」

「その場合、御胤（みたね）を賜るのはやはりナザリックの者が望ましいと思うんだが、お嬢様方はどうお考えかな？」

武人肌のコキュートスにとって、主君の子息の護衛や指南役などはまさに垂涎の立場。
たちまち想像の世界へ旅立ってしまった友人に生暖かい視線を向けつつ、女性陣に問いかける。

「んー、あたしはまだ７６歳だから、ちょっと早いんじゃないかなと思うんだよね。
お嫁さんって立場に憧れないこともないけど。もう少し大きくなってから……かな？」

アウラは闇妖精種としてはまだ子供の年齢であるから、これは仕方がない。将来に期待だね、と頷く。

「わたしは多くは望みんせん。
御方のお気の向いた時にあの神々しいお身体に懐かれる幸福を賜われるだけで満足でありんすから。
――ああ、もちろん、御方から求めて下さるのであれば是非もありんせんが」

これもまた、屍体愛好者のシャルティアらしい答えと言えた。
人の姿も魅力的なのは間違いないが、やはり食指が動くのはアンデッドの姿という事なのだろう。
ここまではデミウルゴスも予想していた。次が彼にとっての本命の相手だ。

「なるほどなるほど。
では――アルベド。君はどうかな」
「ふぇっ!?」
「君は先程言ったね。「ヤマネ様から清純たれと望まれている」と。
という事は、君のその状態は少なくともヤマネ様の希望に沿ったものと言う事だ。違うかね？」

「え、ええ。そう……だと思うわ。
私の性質を変える際に、最初は「モモンガ様を愛する」ようにするお積りだったようなのだけど
モモンガ様がそれをお止めになって、今のものに落ち着いたの」

ふむ、と口に手を当てデミウルゴスは考える。
自身の友を愛すように設定し、それを諌められ訂正した結果として今のアルベドがあるとするならば、
少なくともヤマネ様はモモンガ様の伴侶となることを期待しているのだろう。
それに先程のやり取りである。
アルベドの素っ頓狂な態度も不快とせず、それどころか気遣いと詫びの言葉まで掛けて下さっている。

「……であれば、やはりモモンガ様の伴侶としてはアルベドが最有力候補であることは間違いないだろうね。
ナザリックの今後１００年は、君の双肩に掛かっている。
くれぐれも、御方のお心を裏切ることの無い様に期待しているよ？」

「そ、そんな事言われても、何をすればいいの？」
「サキュバスの本能的に男の悦ばせ方と言うのは感覚で分かったりしないのかね」
「しないわよ！
そ、それにやっぱりそういう事は、愛情が大切だと思うの。
こう、文を交わしたりとか、一緒の馬で遠乗りに出かけたりだとか……」
「がっふッ!?」
「シ、シャルティアが舌ヲ噛ンダッ!?」

頬を染め、もじもじと胸の前で指をいじりながら、ピンクのフリル

にまみれた妄想を撒き散らすアルベド。
ここまでとは思っていなかったデミウルゴスもそのお花畑具合に頭が痛くなる。
「(いや……或いは、そういった無垢な花を手折ることこそが御方の望みかもしれませんね)」
そういった趣向であれば彼にもよく理解できる。
そして、もしそうであるならば下僕風情が軽々しく口を出すべきではないだろう。
先の計画はあくまでデミウルゴスの構想であり、至高の御方からお言葉を賜ったわけではないのだから。
「……分かりました。では一旦この話は保留としましょう。」
「ほっ、ホント!?」
「ですがアルベド。至高の御方のご意思は全てに優先します。
その事だけは忘れずにいて下さいね?」
再びしゅんと小さくなるアルベドを見て心中で溜め息を吐くデミウルゴス。
しかし、彼もまさか自身の主が目の前のへなちょこ同様無垢な身体だとは想像だにしていなかった。
彼の夢見た未来は、まだ遠い。

ユリ・アルファは心身共にすこぶる充実していた。
絶対の主たる至高の御方がこの世界に踏み出す第一歩。その随行を命じられたためだ。
ナザリックに仕える下僕達にとって、至高の御方々に奉仕する事は

義務であり、幸福であり、存在意義そのものである。ましてや御方の傍に侍りその雑事を任されるとあらば、生真面目一辺倒で通っているユリをして、頬が緩むのを渾身の意志で抑えつける必要があるほどに。

ちらりと横を見れば、同じように随伴の命を受けた妹――ナーベラル・ガンマが己の表情筋と格闘している。

普段は仏頂面でいる事も多い妹だが、油断をするとすぐに持ち上がりそうになる口角に四苦八苦し眉を顰めながら頬を両手で捏ね繰り回している姿は何とも可愛らしいものだった。

――出発は１２時間後。

それまでは待機とし、万一の粗相もないよう万全の体制を整えておくようにと命じられている。

弾む気持ちを宥め、自身とルプスレギナ、ナーベラル三人の部屋の扉を叩いた。

「……あら？」

部屋にいる筈のルプスレギナの返事がない。外出しているのだろうか？

首を傾げたが、まあいいか、と扉を開けるユリ。そこで彼女は、世にも珍しいものを見ることになった。

「――これって、ルプスレギナ、よね？」

「その筈だけれど……」

額を抑える二人の前にあるのは、尻。

ベッドのシーツを頭から被り、尻を突き出した体勢ですすり泣く妹の変わり果てた姿だ。

深くスリットの入った僧衣は程よくはだけ、健康的な褐色の太腿と黒のガーター。また悶えながら尻を振るものだから、見えてはいけな

い物もチラチラと見え隠れする。有り体に言って非常に目の毒な状態だった。

「ちょっと！　何があったの？　こらっ、ルプスレギナ、ったら！」

「うー！　うぅーっ！」

腰の辺りを捕まえて布団から引っ張り出そうとするが、布団を掴んだまま暴れてなかなか思うようにいかない。

どったんばったんと大騒ぎをしている隣室を不思議に思ってか、開いたままの扉からソリュシャンが顔を出した。

「あら、姉様方。どうなされたんですか？　扉を開けたままで」

「あ、ソリュシャン。ルプスレギナの様子が可怪しいの。何か知らないかしら？」

ソリュシャン・エントマ・シズの部屋はすぐ隣であるから、彼女が部屋に居たのであれば何か聞いているかも知れない。

「んー……」と、頬に人差し指をあてた格好で考え込むソリュシャン。

「ああ、そう言えば先程、部屋に戻る時にメイド長様とすれ違いましたわ」

「ペスが？」

「はい。傍目にもかなりご立腹の様子でしたから、あるいは姉様が何か失敗をしてしまったのでは……？」

ユリの脳裏に浮かぶのは彼女の友人でもある継ぎ目の入った犬顔。

ナザリック四大良心に数えられる程に温和な彼女が、理不尽な怒りをぶつける筈もなく。

……そんな彼女に、ここまで塞ぎ込む程に叱責されたとするならば、妹は一体何をやらかしたのか――？

一瞬、最悪の想像が浮かんだ。

「る、ルプスレギナ？　ま、まさか、まさかの話だけれど……。御方に何か無礼を働いた……な、なんて事は、無い……わよね？」

返事は、無かった。

ただ、シーツ越しにも判るほどにはっきりと彼女の背筋が跳ね上がっただけだ。

ユリは　めのまえが　まっくらに　なった！

――こんな筈じゃ、なかった。

ルプスレギナ・ベータは煩悶していた。

理由は言わずもがな、先の食堂の一件である。

至高の御方を出汁にした猥談に興じた上に、あまつさえそれで御方の耳を汚すというメイドとしては最悪に近い失態を犯した彼女。本来は死すらも生温い不忠行為ではあるが、当の御方の寛大な意思により罰らしい罰は無し。代わりにメイド長からの指導のみが取り沙汰された。

とはいえ、事が事だけにメイド長の怒りも生半ではなく、２時間に渡って正座で説教を受けたことで、彼女は精神的にも肉体的にも酷く疲弊していた。

しかし、誤解のないよう補足しておくと、彼女は決して忠義心に欠ける不出来な下僕ではない。至高の御方への忠誠心は姉妹たちのそれと比較しても決して遜色はないし、仮に御方から自身の為に首を刎ねろと命じられれば、歓びをもってそれに応えるだろう。

では、何故今回のような事が起こったのか？

それは偏に彼女が生みだされた際に与えられた性質に由来している。

彼女ら姉妹のうち、明確に生真面目な性質を持って生まれたのは長姉と三妹。ユリ・アルファとナーベラル・ガンマだろう。彼女らはたとえそう命じられたとしても御方に対して気安い態度を取ることは困難な程にメイドとしての職務、下僕としての義務に忠実なため、そう言った面で融通を利かせるのが難しいという問題も抱えている。

シズ・デルタについては元々の設定が特殊であるためひとまず置くとして、比較的に融通の利く性質を持っているのがソリュシャン・イプシロンとエントマ・ヴァシリッサ・ゼータだ。彼女らは例えば御方に気安い対応を取るように、と命じられればその通りに対応してみせる柔軟さを持っている。

そしてルプスレギナがどちらに属するかと言われれば、当然ながら後者である。

ひとたび命じられれば、メイドとしての粛々とした対応も、友人のような気安い対応も、果ては敵同士のような尖った対応も全て可能な判断と切り替えの速さを持っている。

が、これが今回は仇となった。

彼女はただ、異変に不安を感じている仲間たちに明るい話題を提供して不安を和らげながら、確実に共感できつつ士気の上がる御方の話題で盛り上がろうとしただけのつもりだった。

思いのほか仲間たちのノリが良かったせいで、つい風呂敷を広げ過ぎてしまっただけなのだ。

それがよりによって最も聞かれてはいけないお方に聞かれてしまった。

「う〝ぅぅぅぅ……」

その場で首を刎ねて下さったならば、己の不忠の報いと潔く死ねただろう。

身の程を弁えよと詰って下さったならば、一頻り泣いてから己を省み、鉄の心で尽くせただろう。

だが、あの裁定はまずい。非常にまずいのだ。

『慕う気持ちからくるものであれば無下に切り捨てるものではない』などと、思わせぶりな態度を取られては。
それが御方の優しさ、下僕に対する慈悲の気持ちからであるとは分かっていても……
『受け容れられるかも』と。期待を、してしまうではないか。

「うあー、もー、何なんすかぁ……！」

心の臓は激しく脈を打ち、動悸は治まることを知らない。
体験したことのない感情に振り回され、ルプスレギナの思考はぐちゃぐちゃだった。
さもありなん。ルプスレギナは姉妹の中では性知識が豊富な方ではあるが、所詮は耳年増でしかない。
図書館で公開されている少女漫画（贈・ヤマネ）。と、何故か近くに収められていた薄い本（犯人：ペロロンチーノ）が主な情報源であり、恋心などという感情はついぞ感じたことがないのだ。
あくまで上記の文献と、強きオスを求める獣人のメスとしての一般的な感性から惹かれるシチュエーションを語っただけで、であるからこそ照れもなく過激な発言ができたとも言える。
だが、今は違う。
あの時と同じ内容を思い浮かべようとすれば、より鮮明なイメージが浮かんでしまう。
御方に抱き竦められ、耳元で愛を語られ、そして――

「～～～ッ！」

内容がエスカレートしそうになったのをぶんぶん首を振って振り払う。顔が林檎のように赤くなっているのは見えずとも明らかだ。
植え付けられた恋心の種は、芽生えたばかり。
彼女がそれを正しく自覚して花開くには、まだまだ時間がかかりそうだった。

「こ、の、駄犬がぁっ!!」
「あぎゃんっ!?」

さて、そんな桃色の煩悶に苛まれながら、なおも褐色の尻をふりふりと悩ましく振りたくる姉妹の姿に、最初に堪忍袋の尾を千切り捨てたのは三女。ナーベラル・ガンマだった。
戦闘メイドとしての主武装であるメイスを手に取り、渾身の力をもって色に惑う姉の尻に向けてフルスウィング。
レベルにおいては末姉に次いで姉妹中二位を誇る妹に全霊で尻をしばかれ、駄犬呼ばわりの姉はダブルサイズのベッドから転げ落ちた。

「あいっだだだだ……。な、ナーちゃぁん……お姉ちゃんのお尻に何の恨みが――」
「正座」
「え」
「せ　い　ざ」
「アッハイ」

ナーベラルは激怒した。
石化したかのように沈黙した長姉に代わり、必ず、かの荒淫無恥の姉を正さねばならぬと決意した。
ナーベラルには大局はわからぬ。後衛寄りのスキルではあるが、中身はぶっちゃけ脳筋だった。
けれど、至高の御方に対する不忠に対しては、人一倍に敏感であった。

「吐きなさい」
「あ、あの……ナーちゃん?」

「いいから吐きなさいこの駄姉。一体何をやらかしたの」
「あう……」

もちろん、無愛想ながらナーベラルとて姉妹の情はあるし、普段であれば姉相手に高圧的に出ることもない。
今回は御方に対するものであった為、本来この役目を負うべきだった姉が思考停止の状態にあったことから、可及的速やかに事情を把握し、来たるべき任務に支障の出ないよう事態の解決を図るべきと考えた為だ。彼女なりに。
その長姉を思わせる威圧感に気圧され、正座したままだったルプスレギナはますます小さくなってしまう。
だが、無礼を働いたというところには頷いても、具体的に何をしたのかという問いには貝のように口を閉ざし、ずびずびと鼻水をすする音だけが部屋に響いた。

「……こうなったら、実力行使しか無いようね……」
「ま、待ちなさいナーベラル！　……私が聞くわ」

かくなる上は無理矢理にでも――！　とメイスを再び振りかぶったナーベラルを、緑のガントレットが制した。
ユリの本音としてはこのまま何もかも見なかったことにして装備の整備にでも勤しみたいところであったが、長姉として流石に姉妹同士で本気の戦闘に繋がるような行為を認める訳にはいかない。
目眩のしそうな状況で必死に己を保ちながら、俯くルプスレギナの前にしゃがみこみ、優しく問いかける。

「ねえ、教えて、ルプスレギナ。貴女が粗相をしてしまったのは、モモンガ様？　それとも――ヤマネ様？」

ヤマネ様、と言う単語に肩がピクリと反応した。
かの御方とすると、今日は昼過ぎから報告会や会議に参加していた

はずなので、何かがあったとすればその前。

「報告会の前……というとお昼時ね。もしかして、食堂でヤマネ様とお会いしたの？」

ビビクンッと肩が跳ねた。間違いない。

とすれば考えられるのは食事関係での粗相か、何らかの会話によるものではないかと想像できるが、ルプスレギナとて一端のメイドである。そうあれと作られていないのに至高の御方相手に皿を割ってしまったり、調味料を零してしまったりといったドジを為出かすというのは考えにくい。

であれば、後者。ルプスレギナは特に公私をはっきり分けるタイプだから、メイド同士の会話であれば相当ぶっちゃけたトークをかましてもおかしくはない。そこへヤマネ様が偶々出くわしたとすれば――

「る、ルプスレギナ？　もしかして、何かヤマネ様に対して大変に失礼な発言をした、とかでは無いわよね？」

ユリの声は震えていた。もしこの予想が当たっていたとすれば、存在から否定されても文句の言えない特級の不忠行為である。祈るような気持ちで妹を見つめる。

だが。

「――わ、猥談を聞かれたぁッ!?」

「なんてこと……ルプスレギナ、貴女よく生きてるわね……」

「う、うぅー……」

字面だけ見るとユリがルプスレギナに辛辣な言葉を投げ掛けているように見えるが、実際のところ込められた感情は怒りや悲しみよりも呆れに近い。

これだけの事をしでかして、手討ちにされていない事がおかしいのだ。
であれば、そこには御方の何らかの意思が込められているのではないか。そうなると過度の叱責や私刑はそれこそが不敬となりかねない。一周回って冷静になってきたユリはそう考える。
眉根をしかめ口元に手をあてながら考え込む姉を見て『何故粛清しないのかよく分からないが、とりあえず今はまだ殴っては駄目そうだ』と、同じポーズを取ってみるナーベラル。
うーん、と可愛らしく首を傾げていたソリュシャンが、そこへ一石を投じた。

「……というか、案外ヤマネ様も満更ではないのでは？」
「……は？」
「いえ、同系統の種族ですし。ルプスレギナ姉様を憎からず想っておられてもおかしくないのでは、と」

ボン、と音が聞こえるかと言うほどにルプスレギナの顔が赤く染まった。
その考えはまさに、先程から彼女の胸に巣食う形容し難い感情の源泉そのものだ。

「な、なななな……」
「……まぁ、それだけの事をしでかしても許されたのは何故かと考えると、一番自然な流れではあるわね。
問題は、それが事実なのか確かめる方法が無いことだけど」

或いは、全く別の深謀遠慮があっての行動かもしれないが、どちらにせよ下僕にそれを推し量ることは難しい。
あわあわと狼狽えるルプスレギナを見ながら、もう放置して明日の準備に専念してもいいかな、とユリは思う。
先程までの緊張が解れ、一気に生温い空気になった部屋に、ノック

の音が響いた。

「あら？　誰かしら――エントマ？　どうしたの」

「あ、ユリ姉様ぁ。セバス様がルプーに『ヤマネ様のお部屋に向かうように』って伝えるようにってぇ」

「「「!!!」」」

これは――来たか。

「る、ルプスレギナ！　すぐに入浴して身を清めるのよ！」

「私は殿方受けのする下着なんかを見繕ってまいりますわ！」

「エントマ！　半刻だけお時間を頂けないかセバス様にお伺いを！」

「はぁいぃ、分かりましたぁ」

時刻は既に夕食時を回り、褥を重ねるには良い頃合いだ。

そんな時刻に自室へお呼びがかかるのだから、そういう事なのだろう。

「うえ!?、ちょ、ちょっと待――」

「さぁさぁ早く！　貴女が蒔いた種なんだから、自分で刈り取りに行くのよ！」

セミスイートの各部屋に、駄犬と呼ばれた姉の悲鳴が響いている。

きっと姉は今日で乙女を卒業するのだろう。それはとても名誉なことだ。

御方に無礼を働いたと聞いた時はどうしてくれようとも思ったが、御方がそうあれと望むのならば是非もなし。

自身とて、好き好んで姉をメイスでしばきたいわけではないのだから、丸く収まって何よりである。

姉妹達の狂騒を横目で見ながら、明日の任務に備えてナーベラルは

省エネ体勢に入った。

「(……どうしてこうなった)」

ヤマネは困惑していた。

例の法国に対するモモンガの策からハブられた事に文句を言ったところ、近隣の都市で冒険者についての調査を兼ねた名声稼ぎの役目をもぎ取った。

前衛は自身が担うから問題ないが、一人では手が足りなくなる可能性を考えれば、もう一人か二人は欲しい。

ある程度自衛も可能な後衛として白羽の矢が立ったのは、ルプスレギナ・ベータ。奇しくも食堂で一席ぶっていたあのメイドだ。

若干気まずい空気になるかも知れないが、食堂での姿を見るにコミュニケーション能力は高かろうし、人の社会にも臨機応変に対応できれば、この任にはうってつけだ。

そう考え、ちょっとした冒険のパートナーにとセバスに件のメイドの召喚を命じた……の、だが。

「る、ルプスレギナ・ベータ！　お呼びに応じ罷り越しました！」

顔を真っ赤にして俯いた褐色の美女が、妖艶なネグリジェに身を包んで己の前に立っていた。

「あー……っと、いや、これはだな……」

「その、お、お手柔らかにお願い致します……っす」

「(あー、やべぇ。可愛い。でもどうしてこうなった)」

緊張からか辿々しくそう言うと、ぽんと飛び込むようにヤマネの胸

に縋りつくルプスレギナ。
むくむくと膨らみ始めた煩悩を気合で抑えつけ、覚悟完了したこのメイドに如何にして任務を伝えるべきか。
ヤマネの受難は、始まったばかりだ。

コーナーストーン

リ・エスティーゼ王国の東南の外れに位置する開拓村、カルネ。
過去の開拓者であるトーマス・カルネが切り開いた小さな村であり、隣国のバハルス帝国との間に点在する開拓村の一つだ。
南のエ・ランテルのような都市とは違い、このような開拓村の住民は常に死と隣り合わせであり、モンスターや野党の襲撃、戦争や冬の寒さなど数えればキリがない程の危険と向き合って生活しているが、カルネ村には他の村とは違う幾つかの強みがあった。
まず、トブの大森林と呼ばれる巨大な森の傍らにありながら、とある強大な魔獣の縄張りに近いことで他の亜人や魔獣に襲われることが殆ど無いこと。
その強大な魔獣も、縄張りの外れに迷い込んだ脆弱な人間程度をわざわざ狩り殺したりしない程度には温厚な性質であったこと。
そして、戦いの心得のない村人でもどうにか行き来できる範囲に薬草の群生地があったこと。
いくつもの幸運が重なった結果、農業と林業に加えて薬草の採取という独自の産業を得ることができたこの村は、近隣に点在する他の開拓村より確かに恵まれており、ある程度の平穏を住民たちに齎していたと言える。
たとえそれが、吹けば飛ぶような砂山の上に築かれたものであったとしても。

その日もエンリ・エモットは森に出ていた。
薬草の卸先であるエ・ランテルのバレアレ薬品店への納品分がまだ確保出来ていないためだ。
彼女の友人でもあるンフィーレア・バレアレとの友誼からすれば、数が多少少なかったとしても契約を打ち切られる事はまず無かろうが、安定して高値で薬草を買い取ってくれる大口の卸先からの信用は落としたくはない。
故に彼女は両親に許可をもらい、妹であるネム・エモットを伴って

薬草の群生地へとやって来たのだ。
ぷちん、ぷちんとリズム良く手を動かし、指定されている薬草の上側の柔らかい葉だけを摘んで行く。
元の部分から刈り取ればもちろん倍以上の量が取れるだろうが、それは薬草の成長を妨げて将来的な収入の芽を摘んでしまう事になるし、品質も劣る。一番薬効の高い、柔らかな葉だけを小まめに摘み取るのが一番なのだ。

「ふぅっ……」

一通りの葉を摘み終わり、布の手甲で額の汗を拭う。薬草の刺激臭が目に染みるが、もう慣れたものだ。

「お姉ちゃーん、こっちにも生えてるよー！」
「取るのは上から四枚目まで。つまんでチクチクする葉は取っちゃダメよ」
「わかったー！」

妹も文句一つ言わずに良く働いてくれている。この分ならじきに採集を終えられるだろう。
エンリの傍らには片手で抱えられる程度の麻袋が三つ。妹が摘んでいる分を手伝えば十分な量だが……

（蓄えになるように、もう少し余分に摘んでおこうかな……？）

指定の量より多少多い程度であれば併せて買い取って貰えるだろうか。
そう考え腰を上げた彼女の耳に、年に数回程度しか聞く事のない音が複数飛び込んできた。

「蹄の、音……？」

「ふわぁぁ……すっごーい！」
「こ、こらっ、ネム！　す、すいません。妹が……」

細い街道には不釣り合いな2頭引きの豪奢な馬車。
御者席で手綱を取る老執事の隣で道案内をしながら、ふかふかの絨毯の敷かれたその中ではしゃぎ回る妹を諌めるエンリ。妹が何か粗相をしないか気が気ではなかった。

「ははは。なに、構わないとも。道案内を頼んだのだから、自分は馬車に乗っておいて相手を歩かせるのは器が知れるというものだ。
お嬢さんはネム、と言ったか。どれ、菓子でも一つどうかな？」
「いいのっ!?　ありがとー!!」
「こっ、こらっ、ネム！」

旅の魔術師とその従者。そう名乗ったこの一行だが、エンリの知る魔術師とは明らかに一線を画している。
仕立ての良いローブを羽織り、宝玉の嵌った短杖を持つ男性に、背筋がピンと伸びた体格のいい老執事。おまけにエンリがこれまでに見たことがない程に美しいメイドが二人。それが屈強な馬2頭に牽かれた大きな馬車に乗って旅をしているというのだから、これは間違いなくお忍びで旅行するどこかのお貴族様に違いない。
機嫌一つ損ねただけでその場で手討ちという事もある世界だから、お貴族様と採集帰りの村娘が相席など正気の沙汰ではない。ネムの仕草や発言一つに二人の命が掛かっていると言っても過言ではないのだ。
目が回りそうなプレッシャーにオロオロする村娘を思いやってか、隣に座る老執事が穏やかな声で語りかける。

「そう心配なさらなくても大丈夫ですよ。我が主は大変にお優しい

方ですから、自身が招き入れた幼子が何か粗相をしたくらいでお怒りになるほど狭量ではありません。
……さ、この分かれ道はどちらですかな？」
「あ、はっ、はい！　左側ですっ！　……その、ありがとうございます」

礼を言った彼女の姿が微笑ましかったか、目を細めて頷く執事。
薬草採取が終わった頃に通りがかった彼らに請われ、エンリは村までの道案内を行っていた。

『リ・エスティーゼと言ったか。この国の王都を目指しているんだがね。なにぶん土地勘がないものだから、どこかで道を訪ねようと思っていたところだったんだ。良ければ、村まで案内してくれないか？』

お貴族様らしき人物にそのように言われて断れるものではない。
村までのたかだか数キロの道程で、１０歳は年を取ったような気分になるエンリだった。

道案内の礼を言うと、一行は村長の家へと向かって行った。
ネムが抱えている、籠いっぱいの砂糖菓子を報酬だと残して。

「すっごくいいお貴族さまだったね、お姉ちゃん！」
「……そうね」

思うことは山程あるが、とりあえず今は置いておこう。
「わたしにも一つちょうだい」とネムの抱える籠に手を伸ばす。

「うぁ、何これ、美味しいぃ……」

頬が蕩け落ちそうな至上の甘露に、エンリは擦り切れた心が癒えて行くのを感じていた。

「ふむふむ。王都へ行くならまず南のエ・ランテルへ行き、街道沿いに西のエ・ペスペルを通って行けば良い、と」

「はい。大きな都市伝いに行けば補給も容易ですし、何よりも安全性が違いますから。ああいや、腕利きの魔術師様でしたらそちらは無用な心配でしたかな」

「いやいや助かるよ。ありがとう村長殿」

そもそも周辺地理などは部下からの報告で彼よりも余程詳しく把握しているから、こうして話しているのは只のアリバイ作りでしかない。

『旅の途中に立ち寄った村で賊に襲われ、やむなく応戦した』という名分が必要なだけだ。

村長と会話をしながら腕の時計をちらりと見やる。予想到達時刻はそろそろの筈だ。

「そ、村長！　帝国の騎士たちが、村に！」

「な、なんだと!?」

良いタイミングだ。モモンガ――改めアインズは内心ほくそ笑んだ。

「奴ら、馬で村を囲むように距離を詰めてきて……」

「何ということだ、女子供を逃がすこともできんのか……！」

慌てる村長達を尻目に、傍に控えていたセバスに目配せをする。

「どうなさいましたか、村長殿。何やらお困りの様子ですが？」

――さあ、茶番劇の始まりだ。

村長の家を出ると、馬に乗った騎士風の者達が遠目にこちらを伺っているのが判った。

人数は二、三十といったところか。多少なり心得があって装備が整っているなら、百人を少しばかり越える程度の村であれば労もなく皆殺しに出来る事だろう。

ユリとナーベラルは既に村人を一箇所に集めるために動いており、それに気付いた騎士たちが慌てて集まってきているのをアインズは首に掛けた護符を弄びながら鷹揚に眺めていた。

騎士たちが広場に集合し終わるのとほぼ同じタイミングで村長宅への避難が終わる。

追い立てる手間が省けたとでも思っているのだろうか。ニヤニヤと厭らしく笑む指揮官らしき男。

同種を獲物と定めて狩り出す昏い歓びに濡れた男の目が、アインズ達一行を捉えた。

下品な顔が怪訝そうに歪む。

「――ぁん？　何だ貴様らは」

「なに、名乗るほどの者ではない。旅の魔術師という奴さ。それよりも、その装いを見るにバハルス帝国の騎士殿とお見受けするが、このような小さな村で武器を抜かれては村人たちも心穏やかではいられまい。如何なる謂れあってのものだね？」

「旅の魔術師！　そうかそうか、それは不運だったな。だが、予定は変わらん。諸君らには死して我が帝国の為の礎となって貰わねばならんからなぁ！」

「……聞く耳は持たず、か。それでは精々、抵抗させてもらうとしよう」

つまらなげにフンと息を吐くアインズの様子が癪に障ったのか、男の顔が醜く歪む。
そして、予定調和の戦いの幕が開けた。

「戦う必要はない。陣を崩さず、あしらうことだけに専念せよ」
「「承知致しました！」」

アインズの命令に承諾の意を返したセバス達は、それぞれセバスを戦闘にアインズを囲み、簡素な陣を構成する。
そんな必要はまるで無いほどの弱卒相手なのだが、彼らも主を護って戦うことに意欲満々な様子なので触れずにおこう。部下の仕事がしやすい環境を作るのも上司の務めだ。
調子に乗ること絶頂で「かかれェ！」と甲高く叫んでいる男は無視し、アインズはこの一団の実質的な指揮官を探した。
流石にあの阿呆が指揮をするのでは規則的な団体行動すら期待できまい。恐らくは副官のポジションに居る者が指揮を担っている筈。
指揮官や戦術の要となる者を集中的に狙うのが有効なのは、歴史上の戦いでもユグドラシルのＧｖＧでも同じことだ。特にユグドラシルはＤＭＭＯであるため、アバターと中の人の視線が必ずしも一致しなかったり、そもそも種族的に前後左右が判別し難い者もいたりしたため、要となる者を見つける難易度はむしろ高い。
全体を俯瞰して要を見つけるのはギルドの軍師役であったぷにっと萌えが、前線の要となる者を見つけるのはタンク役を担っていた餡ころもっちもちが特に秀でていたが、今のナザリックにはどちらも居ない。
とは言えモモンガとて廃人ギルドの長である。相応の修羅場は潜って来ていたし、彼らのように敵を分析したり戦略を練ることだって少なからずあった。彼は彼で比較的何でもこなせるユーティリティプレーヤーなのである。
そして長くペアでしか冒険をしていなかったアインズが、今後起こ

り得る集団戦のリハビリ代わりにと目を付けたのが彼らであった。
「（さぁて指揮官は誰か……って、あれ？）」
真剣な眼差しで集団を見つめていたアインズだったが、すぐにある事に気付いた。
「……管理職の顔をしてる奴が一人いるな」
「は、管理職、でございますか？」
「ああいや、こちらの話だ」
怪訝な顔を向けるセバスに、慌てて取り繕う。
まさかファンタジー世界で疲れた中間管理職のような顔をした兵士を見るとは思っていなかったため、つい言葉を溢してしまったが、実際に目の当たりにするとその通りとしか言いようが無かった。
目から見て取れる責任感がまるで違うのだ。
大多数の兵はただ上から言われたことをこなし、仕事が終われば安酒をかっ食らって寝るだけの、ただの平社員の顔をしている。合成発泡酒がぬるいエールや安娼婦に代わっただけだ。
あのなんちゃって指揮官もそう言えば見覚えがある。親の七光で部長職に着き、商談をさんざん引っ掻き回してくれた取引先のボンボンにそっくりだ。
そして一人、そのボンボンに振り回されていた取引先の主任にそっくりな男がいた。
人種は全く違うが、何というか身に纏う雰囲気がそっくりなのだ。
「奴は確実に中間管理職だ」と。
アインズではなく鈴木悟の勘がそう叫んでいる。
「（……あいつだな。うん、間違いない）」
目標は定まった。が、そうしている間の彼らは何をしていたかと言

うと、一向にこちらへ攻めてくる気配がない。

「――お、おい。お前が行けよ」

「おい、押すなよ！　お前こそ――」

何の事はない。ただの先陣の擦り付け合いだ。

無理もない。ただ、帝国の騎士のふりをして適当に村人を蹂躙し、情報を流すために数人を逃がすだけの簡単な仕事。

正しき信仰に則った神聖なる任務である――と言う建前の元に、事故の鬱憤や欲望を晴らすことができるのだから、役得とすら考える者もいるだろう。

誰だって勝ち戦で死にたいとは思わない。ましてや彼らにとってこれはただの作業や娯楽の筈だったのだから、この人数で囲んで平然としているような魔法使い相手に先陣を切って立ち向かえるような者などいる筈が無かった。

早く突っ込めとがなり立てる上司と、纏う雰囲気が明らかに素人のそれではない敵。

進退窮まった彼らが目を向けるのはやはり信頼できる実質の指揮官だ。

だが頼られた側とて不安に思うのは変わらない。

何故接近されているにも関わらず何の対応も取らないのか。

それだけ自身らの実力に自信があるからなのか。

得体の知れないモノと対峙する不安感は副官の心も蝕んでいる。

「何をやっている！　相手は棒立ちではないか！」

だが、観戦者でしかない彼の上司にはそんな事は関係がない。無謀な魔法詠唱者と爺を叩き伏せ、見目麗しいメイドたちを自身に献上せよと急き立てた。

上も下も信仰そっちのけで動物的な欲求に正直になり過ぎている。曲がりなりにも敬虔な信仰者であるつもりの副官――ロンデス・グラ

ンプ――は、ひどく遣る瀬無い気持ちになりながらも必死に自身と仲間達を奮い立たせる。

「隊長殿の仰る通りだ！　相手は女と老人を入れてたったの四人。このようなことで怖気づいていてはかの『鮮血帝』陛下に首を刎ねられてしまうぞ！」

あえて相手を侮った、そして芝居がかった言い回しをするのは、仲間達にこれがいつもの任務である事を思い出させるためだ。尚も動かない相手に不気味さはあるが、尚更こちらから戦端を開かねば戦いが始まらない。尻込みしていた仲間たちもロンデスの思惑通り、自身の任務を思い出したようだ。一斉に剣を構え始める。

「……ようやくやる気になったか？　練度の低い兵を抱えるというのは大変だな」

ため息混じりのアインズの言葉には努めて耳を貸さない。せっかくやる気になった仲間たちの勢いを殺ぐのは止めて頂きたい。

「かかれぇっ!!」

先陣を切るのは当のロンデスだ。テクノロジーの発達した時代において指揮官先頭という言葉は廃れて久しいものだが、通信技術が発達しておらず、且つ個人の戦力に大きな隔たりが生まれやすいこの世界においてはさして珍しいものではないし、俯瞰して戦場を観察し見極めるなどという高度な訓練を受けた者はこのような任務には着くことはない。

彼らが陽動のターゲットとしている王国戦士長の部隊にはとても及ぶべくもないだろうが、それでも同じ鍋の飯を食った仲間達との突撃は互いの緊張や不安を吹き飛ばしてくれる。

鈍く光る刃は標的となる魔法詠唱者を確かに捉え――

「――運の巡りが悪かったな。〈心臓掌握（グラスプ・ハート）〉」

その心の臓を狙った切っ先は隣に控えていたセバスによってつい、と逸らされ

同時にアインズが突き出した掌は、過たずにロンデスの心臓を掌握し、即座に握り潰した。

突如崩れ落ちたロンデス。

彼に何が起こったのか、騎士たちの中でそれを正しく認識できた者はいなかった。

呆けたような声をあげる者、倒れた彼を助け起こそうとして、その口から滴るドス黒い粘体を見て凍りつく者。

息絶えた男の死体。その穴という穴から漆黒の泥が止めどなく溢れ出し、その身体を覆っていく。

すっぽりと身体を覆い尽くした泥は目まぐるしく蠢き、脈動しながら歪なヒト型を形作っていった。

周りの騎士達より頭一つ大きく膨れ上がったそれが吸い込まれるように鎧の中に収まった時、そこに立っていたのはロンデスではなく、血管のように脈打つ漆黒の鎧を着た死霊の騎士だった。

「（うっわ、グロッ!?　村人達を建物に避難させておいて正解だったな）

――デスナイトよ。主人としての最初の命令だ。その者達を逃がさず、死なん程度に撫でてやれ」

主人からの命令を受け、デスナイトの虚ろな眼窩に炎が灯る。

己の存在意義を果たすことができる。その歓喜にデスナイトは悍ましい雄叫びを上げると、その眼光をかつての仲間へ向けた。

「ヒッ、ば、化け物ッ!?」
「来るな、来る――げぼっ」

剣の腹で殴られ、膝が逆に曲がる者。
盾で弾き飛ばされ、木の葉のように吹き飛ぶ者。
つい前日には無辜の村人たちを笑いながら追い立てていた騎士たちは、アインズの命令通り『死なせてやらない』程度の力加減で暴れ回るデスナイトに蹂躙されていく。
肉の身体を手に入れた事によって人としての感覚を取り戻したアインズだったが、首に掛けた精神保護の護符の効果もあり、先程の〈心臓掌握（グラスプ・ハート）〉による殺人にも、今目の前で行われている蹂躙にも動揺はない。
そもそも鈴木悟の人生においてゲーム以外の荒事を経験した事は確かに無いが、かと言って彼が平穏な環境で生きてきたかと言えば、決してそんな事は無いのだ。
往来を歩くのにすら防護服を必要とする激甚な環境汚染。
曲がる路地を一つ間違えれば、最下級層民達が残飯の分け前を巡って掴み合い、敗北者は手当てすら施されずにそのまま乾いていく。
反社会主義者のテロに巻き込まれかけた事もあった。それも彼が特別だからではない。地震や台風が起こるように、ありふれた事なのだ。
百数十年前には「人命は地球より重い」などという言葉もあったそうだが、２２世紀の現代で同じ言葉を吐いても、聞いた者の殆どは首を傾げるのではないだろうか？
この時代の殆どの者に必要とされて教育される事になるのは、企業の歯車として生きる為の論理であり、それさえ遵守できていれば使う側としては何も問題はない。用が無くなれば切り捨てる程度の者達に御大層な倫理観を教えても仕方がないのだ。
ひと握りの「持てる者」を除けば、誰もが先の見えない暗闇の中で、奈落に落ちないよう這い蹲って生きている。身内なら兎も角、他人の生死にどれだけの価値があるだろう。

鈴木悟たちの生きていた時代は、そういう時代だ。
――ごく一部の、前時代的な感性を持つ者達を除いては。

「(だからアイツを連れてこれなかったんだよなぁ)」

前世紀の文化に触れて育ち、そこから倫理観を学んだヤマネは、あの時代には珍しい程に情に厚く、そして激しやすい。
この場にもし彼がいれば『死なない程度』などという生易しい事には決してなるまい。容赦なくその爪牙を振るい、騎士たちはバラバラを通り越して血煙と化していくだろう。ナザリックの下僕たちからすれば支配者の勇姿に変わりはないだろうが、現地住民からの第一印象は恐怖の大王。それでは困る。
これで少しは溜飲を下げてくれればいいのだが。

「――あー、デスナイト。お楽しみは終いだ。全員鎧を剥いで縛り上げておけ」

もはや騎士たちに立つ者はおらず、誰もが呻き声か啜り泣きを零すだけの不格好なオブジェと化していた。
何故か指揮官を丁寧かつ執拗に痛めつけていたデスナイトだったが、アインズの声で我に返ったように背筋を伸ばすと、セバス達が集めてきた縄を使い、手際よく元同僚たちを縛り上げていった。

「まぁ、第1段階はこんなところか」

「――本当に、何とお礼を申し上げてよいやら……」

ペコペコと米搗き飛蝗のように頭を下げる村長は、先程に倍して丁重な態度だった。
それも当然である。練度は然程無いとは言え完全武装の騎士。馬

に乗ったそれが３０も居れば、たかだか１２０人やそこらの小規模村落など赤子の手を捻るほどに容易く蹂躙できるだろう。それを無傷で制圧してのけた人物の勘気をこうむるようなことが万が一にでもあれば、次にああなるのは自分達かもしれないのだから。

（そこまで畏まらなくてもいいのになぁ……）などと思ってしまう辺り、アインズの方こそゲーム脳が抜けていない。

「いえ、私達が矢面に立って彼らに対処したという事は事実ですが、彼らの標的には私達も入っていましたから。降り掛かる火の粉を払い除けただけの事です。それに、皆さんはよそ者の私達にも色々と親切にして下さいましたから、そのお返しとでも思ってください」

「あ、ありがとうございます……」

音も立てぬほど丁寧に卓に置かれたコップを掴み、ずず……と白湯を啜りながら適当に受け答えをする。この村へ向かっている王国戦士長を待つ間、ついでに村人たちの不安を拭い、信頼を得ておけば今後の為にもなるだろうという程度の腹積もりだ。

何気なく窓から外を見れば、村の広場にはかつての同僚を縛り上げたデスナイトがどことなく満足げに佇んでいた。

ガゼフ・ストロノーフは困惑の中にいた。

貴族派と呼ばれる王国の上層部の一派が平民からの成り上がり者である彼を疎み、謀略をもって抹殺しようと画策している事は彼も承知している。

それでも民を見捨てることを良しとせず、叶うことならその謀を真っ向から食い破ってやろうという心積もりで出兵を決意したのは他ならぬ彼自身だ。

だが、いざ救援に来てみれば既に賊達は退治され、捕縛された後だと言う。

そこまでは良い。この手が届かなかったことには忸怩たる思いこ

み上げるが、民の安寧には代えられるものではない。
また、それを為したのが冒険者や村人達の自警団であったならば、彼も心からそれを喜び、彼らの肩を叩いて賞賛できただろう。何せお人好しのガゼフであるから、個人的に報奨を出すことすら考えたかもしれない。
だが、実際にこの村を救った者達は違った。
広場の端に置かれた剛健な馬車は、遠目にもその装いが高価なものである事は見て取れる。凡百な貴族では身代を潰しかねない物だろう。
明らかな貴人が僅かな供を連れてこのような小さな村を訪れ、そして救うことにどのような意味があるのか？
そしてそれが己にどのような脅威、或いは恩恵を齎すのか。武人一辺倒なガゼフには到底読めるものではなかった。

「(だが、手を拱いて見ているわけにもいかん)」

広場の中心にはやけに大柄な兵の姿。その後ろには武装を解除され、縛り上げられた狼藉者たちの姿が見える。
村を救ってくれた功労者に対しこちらから非礼を働く訳にはいかない。もし相手が貴族であるのならば尚更だ。彼らの真意がどこにあるにしろ、ガゼフの取りうる手段は一つしか無いのだ。
静かに気合を入れ直すとガゼフは馬から降り、広場にて彼を待っていた者達に向き合った。

「私はリ・エスティーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。この地を荒らし回る帝国の騎士達を掃討する任を受け、村々を回っている。この村の代表はどなただろうか」
「お、王国戦士長様……!?　わ、私が村長でございます」
「村への救援が遅れたこと、真に申し訳なく思う。よければ、この状況について説明願えるだろうか」

「は、はい。実は……」

王国戦士長については下僕たちからの報告である程度見知っていたアインズだったが、実際の戦士長は彼が想定していたよりも誠実な男に見えた。

国家の重職にある者がたかだか小さな村の村長や、どこの馬の骨とも知れぬ魔術師相手に馬を降り、同じ目線で問いかける。その姿勢に村長も緊張を解されたのか、肩書に強張っていた表情も幾分和らいでいた。

村長から簡単な説明を受けたガゼフが、今度はアインズに向き直る。背丈はちょうど同じくらいか。

「――失礼。この村の恩人殿の名を伺っても宜しいだろうか？」

「ゴウン殿、と仰ったな。……この村を救って頂き、本当に、本当に感謝する……！」

村長から事のあらましを聞いたガゼフは、アインズに向き直ると、その手を両手で掴み深く頭を下げた。

国家防衛の要たる戦士長が下手に出すぎではないかと誹る輩も居ろうが、此度の襲撃はそもそもがガゼフに的を絞っての謀略によるものだ。己の不足を補い、無残に踏み躙られるはずだった村人たちの命を救ってくれた相手に礼を尽くさないのはそれこそ狭量というものだ。

それに、そうさせたのにはアインズ達の身なりや立ち振舞いも大いに関わっている。

当人は旅の魔法詠唱者と名乗ってはいる。魔法詠唱者と言うのはその通りなのだろう。広場で仁王立ちしているあのアンデッドはアインズが呼び出したものと村長から聞いている。あれだけの強力な

アンデッドを呼び出せるからには相当の――それこそ帝国の魔導師長に匹敵するような――魔法詠唱者である事に間違いないだろうが、どこの世界に家令と侍女を連れて馬車で移動する旅人がいるのか。

主人の傍に控えるのは、ただ佇む姿にすら一片の隙も見せない、まるで鋼のような家令。

王国屈指の達人であるガゼフをしてその強さの底が見えない彼は、いざ有事の際には前衛としてその力を振るうのだろう。

またその後ろには、見たこともない程の極上の美女が二人。侍女服を身に纏った彼女らも立ち姿は素人のそれではない。いずれも見る目が無い凡愚なら下心から、見る目がある貴族であれば護衛も含め、千金を積んでも招聘を願う程の逸材だ。

それに、何よりガゼフの肝を冷やすのは、彼らが主人を見る目だった。

報酬に対して忠義を返す、などという生易しいものではない。彼らは千金どころか万金を積まれようとも一顧だにせず自身の主に尽くすだろう、そう確信させるだけの熱量を秘めた目だ。

信仰にも似たその忠義心は、ガゼフの知る中では黄金の姫にその騎士が捧げるそれにも似ているが、まだ若く揺らぎやすいかの騎士とは違い、彼らのその信仰心は決して揺らぐ事はないのではないか。そう感じられた。

一方で忠義を捧げられる側のアインズはと言えば、こちらは驚くほどに腰が低い。圧倒的に優位な立場にありながら、自身が救った村の村長にさえ敬語で接しており、逆に従者側がやきもきしている始末なのだから、恐らくは先入観無しで彼とだけ相対していれば、やり手の商人か何かと思っただろう。

そしてこれらから察するに、アインズ・ウール・ゴウンという人物は恐らくは他国の要人。

領地を治めているのであれば善君、少なくとも部下や民からは極めて慕われているのだろうと思われる。

そんな人物が何故このような小さな村を訪れ、そして危機を救ったのか。

その意図は生憎ガゼフには読めないが、こうして頭を下げられた事にあたふたとしている姿からは、謀の匂いは微塵も感じられない。
それ故に。

「(――俺達は、一刻も早くこの村を離れなければならん……!)」

件の騎士たちは既に完膚無きまでに心を折られており、軽く尋問すれば驚くほどあっさりと自身達が法国から来た工作部隊である事を認めた。
王国の貴族派と、彼ら法国の狙いは間違いなくガゼフその人である。
幸いな事に村の損害は皆無。また、囮であり謀略の証拠でもある工作部隊は全て目の前の御仁が捕縛してくれているのだから、後は一連の騒動の下手人として彼らを連れて帰還すればいい。
これ以上この村に留まっていれば、このような弱兵ばかりの囮部隊ではなく本命の特殊部隊などが彼を狙ってやって来ることだろう。そうなればせっかく助かった村人を危険に晒すことになる。
なにより、事は要するに王国内の内輪もめである。無関係な他国の貴人を巻き込むのは心情的にも、政治的にも絶対に避けるべきだと言えた。

「恩人には然るべき礼と報酬をご用意するのが筋と言えようが……申し訳ないが私は任務中であり、貴殿へお支払いできる報酬をすぐに用意することができないのだ」
「報酬？　……ああ、いえ。その必要はありませんよ。あの程度の兵たちであればさしたる手間でもありませんでしたし、『困っている人を助けるのは、当たり前』ですからね」
「……!!」

困っている人を助けるのは当たり前。その言葉にガゼフは目頭が熱くなる思いだった。

平民の事を奴隷や、絞れば税を出す草か何かのように考えている者すら少なくない王国で、実際に民のために力を尽くしこのような発言が出来るものがどれだけ居ることだろうか。

「その厚情に心から感謝する。……だが、それではこちらとしても気が済まない。もし今後王都へ向かう予定であれば、その時には是非当家を訪れて欲しい。あまり大きな屋敷ではないが、心から歓待させて頂こう」

「(よし!)……ええ。王国最強と名高いガゼフ殿にそこまで言われては否やはありません。この縁こそが此度の何よりの収穫と言えましょう」

「そう言って頂けるとこちらもありがたい。それでは、彼奴らを連行する準備を整え次第、お暇させて頂くとしよう。事は急を要するのだ」

アインズの今回の目的は幾つかあるが、まずヤマネのストレス解消。それに続くのが、今自身と固く握手を交わしたこの男と繋ぎを作ることが挙げられた。

なにせ、今の彼らは謎の転移によって既存勢力の領土に居座っている状態であるからして。

別にそれを咎められたところで大した障害となるわけではないが、ある程度の筋は通しておく必要がある。そうヤマネが主張し、アインズも同意した結果である。

言うまでもない事だが、部下達からの報告によってアインズは既にこの村が襲われた経緯も、諸々の背後関係もほぼ全て把握している。王国が王党派と貴族派に割れていることも、八本指と呼ばれる犯罪組織が横行していることも百も承知だ。

デミウルゴスやアルベドなどはこれらの情報からこの国を崩す方法を幾通りも考え出し、与し易しとして侵略も当然進言していたが、全て棄却されていた。

当たり前のことだ。そもそも元社畜……もといサラリーマンの二

人に国を治めよう、支配しようなどという欲求がある筈がない。
一段落したら冒険者としてこの世界の探求に漕ぎ出そうと考えている二人からすれば余計な重荷を背負わせてほしくはない。むしろ世界には程々に体制を保っていてくれた方が後々の冒険に深みが出るだろうと考えているのだから。
「征服とか支配とか要らんからお前らもそろそろ連携の練習始めとけ。ペアの冒険だけじゃ限界がある」と逆に説教されてしまうのも宜なるかな、と言ったところだ。
なおここで「お前達はかつての仲間たちの後継として、彼らの役割を担っていって貰わねばならぬ」とアインズに諭されたナザリックの頭脳二人と、彼らからその言葉を伝えられた守護者たちに起きた変化を語るのはまた別の機会とする。

最後にもう一度、深く頭を下げてから踵を返すガゼフ。短いやり取りではあったが、その節々にはアインズに対する敬意が見て取れた。性格的にも通ずるところのあるセバスなどは、ガゼフという人間を好ましく感じているようだ。
一方でアインズは、心中で首を傾げていた。

（……戦士長って、確か王国じゃかなり有名な偉い人物なんじゃなかったか？　やけにへりくだった態度というか、むしろ立場が逆みたいな対応だったけど、何であんなに好意的だったんだ？）

伴としてセバスとメイドたちを連れているのは『最低限の護衛を！』と守護者が懇願するためであったし、馬車に乗っているのもその延長として当然のように用意されていたものだ。
この世界の生活をまだ深く知らないアインズにとっては『この世界にはそんな魔法詠唱者もいるのかな？』という程度の気持ちであったが、シモベ達としては『至高なる御方の出征である。最低限度の品位と快適性を確保する事は当然！』という有様だから、彼らの認識は何処までも平行線。結果として貴族や王族だろうとガゼフが勘違いし

てしまうのも無理は無い。
ちなみに、ヤマネは何も口出しをしなかったが、アインズを見送る時の彼の視線は大変に生温かかった。
「しかし、すぐに発っちゃうかー……。間に合うかな、法国……？」
こっそりと〈伝言（メッセージ）〉を使ってナザリックと連絡を取る。計画はここからが本番なのだ。

コーナーストーン　―2―

「急げっ！　一刻も早くこの村を出るぞ！」
「重い鎧などは置いていけ、指揮官のものだけあればいい！　馬に括り付けたらすぐにでも出立だ！」

部下に指示を出すガゼフの顔は鬼気迫るものがあった。
今回の件が貴族派の謀と知っている副長は同じく険しい顔で忙しなく動き、隊員達も釈然とはしないながらも尊敬する隊長の指示だ。その仕事をしっかりとこなしていた。
だが、現実は優しくなかった。少なくとも、今のガゼフにとっては。

「せ、戦士長！　周囲の警戒にあたっていた者から、魔法詠唱者らしき複数の人影を確認したと……！」
「な……!?　くそッ、間に合わなかったか……ッ！」

「成程、村々を襲ったのはやはり囮。本命は私の命という訳だ」
「……戦士長殿には心当たりがおありで？」
「ああ。ここへ来るまでにも有形無形の妨害があった。既得権益を守ろうとする貴族の力は恐ろしい」

苦虫を噛み潰したような顔でガゼフが零す。
やはりと言うか、あの者たちは「帝国騎士を装って王国の村々を襲い、二国の関係を悪化させるという表向きの任務だけ言い付かっており、それ以外の事は全く知らされていなかった。
そのため村を囲んでいると思われる集団の素性は不明だが、恐らくはスレイン法国の特殊部隊。ガゼフを殺しきろうというなら、その中でも最精鋭の六色聖典と呼ばれる部隊が候補に挙がる。
自身だけであれば突破も可能かも知れないが、その際に失われるであろう部下達の命と村人たちの安全を考えれば、その選択をする事はガゼフには絶対に選ぶことが出来ない。

とは言え、彼の隊の戦力だけではかの部隊と戦うには戦力不足。戦っても諸共に玉砕が関の山と言える。
そうなれば、せっかく救われた村は改めて戦火に包まれることだろう。それどころかアインズに傷でも付こうものなら、今後の外交問題にすら発展する可能性がある。

（と、なれば……。選択肢は一つしか無いか）
「……ゴウン殿。既に多大な恩を受けている身で厚顔無恥にも程がある話なのだが、是非にも受けて頂きたい頼みごとがある」
「それは、今村の周りを囲みつつある集団に関わるものですか？」
「その通りだ。――私と部下たちが彼奴らを抑え、時間を稼ぐ。その間にどうか、村の者たちを伴って逃げてはくれまいか」
「……は？」

予想外に言葉を聞いた、という風情でアインズが口をぽかんと開け、首を傾げる。

「此度の騒乱は元はと言えば王国内の内輪もめのようなものだ。無関係な他国の方を巻き込んで良いものではない。せっかく救われた無辜の村人も、な。勝手な話ではあるが、彼らの先導をお願いしたいのだ」

ここから南へ向かえば、エ・ランテルがある。
まさか主目的でもない村人を殺すために、わざわざ城塞都市まで追手を差し向けるような事もあるまい。目的であるガゼフの命を奪った後、彼らが意気揚々と引き上げた後に戻って来れればそれでいい。

「あ、いや、助太刀などｈ「それはいかん」えっ」

そんなガゼフの悲壮な決意が顔に出ていたのか、やや焦った様子のアインズの言葉を片手を上げて遮る。

ああ、やはりこの御仁は善性の方なのだな、と死地にあるにも関わらず笑みが溢れた。

「従者の方々の態度を見ても分かる。領主か、王族か。深く詮索する事ではないが、ゴウン殿はこのような場所で身を危険に晒していい身分の方ではないだろう？　そのお気持ちは涙が出るほど有り難いが、ここはどうか、私の我儘を通させてはくれまいか」

「えー……」

一人納得し頷いているガゼフに対して、むしろ窮地にあるのは逃げろと言われたアインズの方だった。

彼の予定ではここでガゼフに冒険者としての自分を高く売り込む筈だったのだが、既に想定より高く買われてしまった上に、本来の目的である筈の法国の部隊への制裁から遠ざけられようとしている。何故だ。

というか、何故自分が他国の貴人などという話になっているのだろうか。

否定しようにも後ろの従者たちは「やはり至高の御方の威光は分かる者には分かってしまうのだなあ」という顔でいるため、全く説得力が出せない。少しは取り繕う事を学んではくれないだろうか。

（ど、どうしよう……）

「……それでは、ガゼフ殿はどうなさるのですか？」

「なに、伊達に戦士長などと大層な肩書を頂いている訳ではない。連中の目的は私の命。部下たちと共に守ることに専念すれば、それこそ夜までだって持ち堪えて見せましょう」

「いやいやいや……」

駄目だ、この男は完全に捨て石となるつもりで決意を固めている。

隣でセバスが拳を握りしめた音がした。いざとなれば自分が――そんな事を考えているのかもしれない。

だがそれは駄目だ。ガゼフが死ぬのも困るが、セバスに前面に出られてはアインズの考えていた法国への対処プランが瓦解してしまう。
故にアインズはここで提案しなければいけない。
ガゼフは死なせず、尚且つ自身が自然な形で法国の部隊と対峙する方法を。

（――待てよ？　そういえばさっきのデスナイトが……
「……ではガゼフ殿、こういうのは如何でしょうか。私が前に出ず、かつガゼフ殿に助力する方法です」

頭の中で先の展開をシミュレートしながら、慎重に言葉を並べる。
助力と口に出した瞬間にセバスが前に出ようとしたので手で制した。お前じゃない、下がってろ。

「広場に立っている黒い騎士がいたでしょう？　あれは私が召喚し、法国の騎士たちを撃退するのに用いたアンデッドです。あれをお貸ししましょう」
「なんと……！　彼は護衛の一人では無かったのか」
「ええ。魔力さえあればまた生み出せる程度のものです。たとえ討ち倒されたとしても私には何の痛痒もない。だが、貴方の力になることはできるでしょう」
「いや、だが……」
「……ガゼフ殿。貴方こそご自身の重要性を正しく理解してらっしゃらないのではないでしょうか。王国戦士長という肩書きは、誰にでも与えられるような軽い名ではないでしょう？」

言い募ろうとするも、咎めるような目にぐっと声が詰まる。事実その通りだった。
王国戦士長は今代の王がガゼフの為に新設した役職である。
平民出身であるが故に一軍を与えられてこそいないが、彼が率いる部隊は戦においては遊撃部隊として働き、凡百の兵では何人いても突

破されうる少数の強者を叩く役目を担っている。
そんな最精鋭部隊を率いる王国戦士長という存在は、平民出身の兵たちにとっての憧れであり、精神的支柱でもあるのだ。

「だ、だが・・・」
「もちろん、貴方にも譲れない一線があるのでしょう。だから、これは折衷案です。貴方は私を戦いに巻き込みたくない。私は貴方を死なせたくない。その両方を満たすための」

それに、と続ける。

「貴方は仰った筈だ。「王都を訪れた時には歓待を約束しよう」と。まさか王国戦士長ともあろう人が、結んだばかりの約束を反故にされては困りますよ？」

一転しておどけたように笑うアインズに、遂にガゼフが折れた。

「……ふふ、貴殿には……敵わんな」

もし全ての貴族が彼のような志を持っていたなら、どれだけの人が救われただろう。
もしガゼフが、王に拾われ、多大な恩を受ける前に彼と出会っていたなら――きっと、彼に仕えることを伏して願い出ていたことだろう。

「万軍に勝る助力、有り難く借り受ける。
そして、確約はできん、できんが……王から授かったこの王国戦士長の役目と剣に誓い、
私は生き残る為に全力を尽くすことを誓おう」

真っ直ぐにアインズの瞳を見つめ、そう宣言する。

眉間に皺を寄せ、頬と涙腺が緩むのを全力で押し留めている彼の顔は、酷くしかつめらしかった。

アインズが呼び出した死の騎士は、広場で待機していた時のあのおどろおどろしい雰囲気はどこへやら、鉄の鎧に長剣を携えた、無骨な巨漢の戦士にその姿を変えていた。

その変貌ぶりにガゼフが目を丸くしていると、

「招かれざる客は天使を呼び出している様子。呼び出したモノの格は此方が上ですが、アンデッドに神聖属性は些か相性が悪い。なので――」

幻術による擬装を施しておきました。

そう事も無げに宣う目の前の魔法詠唱者の底知れなさには、ガゼフも苦笑いしか返せない。

「何から何まで有り難い限りだ。これは、王都では身代を潰す覚悟で持て成さねばならんな」

「そうですね。その際には、今は別行動を取っている私の連れも紹介しましょう。あれは貴方とも気性が近い。きっと気が合うことでしょう」

「他ならぬ君の友人だ。きっと素晴らしい出会いとなることだろうな。では、さらばだ！」

「（ふぅぅ、何とかなったか……）」

アインズにとって最悪の展開は、ガゼフ達が勝手に玉砕してしまう事だ。

志は立派ではあるが、せっかくコネを作ったのに無用な戦闘で死なれては困る。

わざと目立つように村から駆け出していく戦士長達。

アインズがその背を眺めていると、避難の支度を終えた村長が駆け寄ってきた。

「あ、アインズ様。村人たちの避難準備が整いました！　いつでも出発できます」

ガゼフがアインズと相談をしている最中、彼の意を受けた副官が家々を回り、避難を促していたためだ。

アインズがそれに反応し振り返ると、村長の後ろには彼の家族や、最初に出会った少女達が不安そうな顔で背嚢を背負って彼の指示を待っていた。

「ああ、いや、皆さん。準備をさせてしまって申し訳ないが、避難をする必要はありません」

「は？　そ、それは、どういう事でしょうか……？」

「彼らの勝敗に関わらずこの村に危害が及ぶことはありませんから。先程は彼らの顔を立ててああ言いましたが、危なくなれば有無を言わせず割って入りますよ」

酔い潰れたら背負って帰りますよ、とばかりの気楽さで答える青年に、村長は二の句を継ぐ事が出来なかった。

ニグン・グリッド・ルーインは、罠にかかった獲物を眺めて薄く笑んだ。

近隣の人類国家が彼らスレイン法国の主導により統一され、神の名の下に一丸となって団結する為に障害となるのは、他の二国。王国と帝国の支配者層達だ。

中でも王国の治世は腐敗を極めており、もはや王ですら貴族たちの横行を制することが出来なくなっている始末。もしもかの国が法国へ無条件で降伏したとしても、円滑に国を運営していく為には大粛清

が必須となるだろう。それほどのものだ。
そんな腐れ切った国の中にあって、民や兵達の精神的、物理的な支柱となっている人物。それが王国戦士長。ガゼフ・ストロノーフという存在だった。
さすがに神人や逸脱者には届かねども、剣の腕一つで王国の武を支える一柱へと上り詰めたその実力は本物と言え、法国におけるエリート中のエリート、陽光聖典の隊長を務めるニグンとて、真っ向からぶつかれば勝ちを拾う事は極めて困難だと、癪ではあるが認めざるを得ない。
だが。

「哀れむべきは、王国に生まれた事よな」

彼は今、王より貸与された宝具を身に付けることを許されず、僅かな手勢と共にかのような辺境の村落に釘付けにされている。それも同じ王国の貴族の謀りによって、である。
そうしていると村に動きがあった。どうやら標的は己を囮とし、村人を逃がすつもりのようだ。愚かな事を、と鼻を鳴らす。

（命の取捨選択もできぬ者に大業が成せるものか。小を切り捨てててでも大を生かさねば、個々の力に劣る人類に生存の道は無いと言うのに……！）

命に貴賤の差は無くとも、人が何を成し生きてきたかでその命の価値は変わる。そして価値ある者は泥水を啜ってでも生き残り、その義務を果たすべきだ。そうニグンは考えていた。
もし、ガゼフが法国に生まれていたなら、王国より先に法国にその才を見出されていたなら、或いはニグンと轡を並べて戦う事もあったのかも知れない。
そんな益体も無い想像が脳裏に浮かぶが、努めて振り払った。
任務に私情は不要、ただ心を鋼で覆う。

「……まあいい。獲物がわざわざ巣穴から出て来てくれると言うのなら、我らの任も滞りなく果たせようというものだ。
――総員、戦闘準備！　汝らの信仰を、神に捧げよ」

より多くの人類の生存の為に、同じ人類を殺める。
法国が、そしてニグン達が何度も繰り返してきた人類種の自傷行為が、また始まる。

「全員馬から降りろ！　剣が当たらない程度の距離を開け、出来るだけ纏まって戦うのだ！」

村が戦火に巻き込まれるのを避けるため、敢えて遮蔽物のない草原へ打って出たガゼフ。彼が出した命令は密集陣形。兵士同士が互いにカバーしあい、長期間を戦う為の策だった。

「敵が召喚したあの天使は、単純な物理攻撃は効きが悪いらしい。無理をせず複数人で対処して、止めは武技が使える者か、俺たちに任せろ！」

天使は簡易な障壁を持ち、物理に強い。これもアインズが教えてくれたことだった。
彼らの目的は生き残る事ではない。彼らが己らに課した目標は最後の一兵に至るまで戦い抜き、一分一秒でも長く敵兵の足を止めること。死兵と化した彼らの目には使命感の炎が灯る。

「ふん。猪武者では無いようだが……死ぬまでの時間が少々伸びただけに過ぎん。所詮ストロノーフ以外は寄せ集めの兵よ」

頬の傷を指でなぞりながら、ニグンが吐き捨てる。
彼はその能力に比例するかのように自尊心の高い男だったが、敵の

戦力分析を怠る事はしないし、相手が格下だとしても舐めてかかるような事は決してしない。
古傷がそうせよと囁くのだ。嘗ての敗北を、屈辱を忘れるなと。
ニグンの読みでは普通に戦って半刻、陣形を変えたとしても精々が一刻かそこらといったところだ。
このままぶつかれば戦況はまず間違いなくニグンの読み通りに推移する。間隙無く続く炎の上位天使の攻め立てに兵たちは少しずつその数を減らし、そして独りとなったガゼフの身体に天使たちの剣が一斉に突き立つ事だろう。
――彼らの戦力が村に入る前と同じであったならば。

「……何だ、あの兵は？　ストロノーフめ、オーガに鎧を着せて部下にでもしたのか？」

ガゼフの隣には、大柄な部類に入る彼と比較してさえ頭一つ二つ大きい、巨漢の兵が佇んでいた。
大の大人がすっぽりと隠れられるようなタワーシールドと、そこらの兵であれば両手でも持ち上がらないような巨大なフランベルジュをそれぞれの手に携えたその男は、ガゼフの横にぴったりと位置取り、無表情にニグン達を睥睨している。
その仄暗い枯木の洞の様な瞳に射竦められ、誰とも無しに薄寒さを感じる隊員達。ニグンもまた、頬の傷が疼くのを感じていた。

「た、隊長……っ！」
「狼狽えるな！　ええい、ストロノーフめ、アレは何だ？　魔神にでも魂を売り渡したと言うか!?」

始まった時点ではまだ天頂に近かった日が紅く染まり、疲れ果てた戦士達を照らしている。
ニグンの予想は大きく外れ、戦闘は二刻を数えても今なお継続して

いた。
ガゼフ隊の隊員達は櫛の歯を欠くようにその数を減らしていき、現在戦えるのは彼を含めたったの二名。
だが彼らはその状況となってからなお、一刻以上の時を稼ぐ事に成功していたのだ。
むしろ圧倒的に有利だった筈のニグンの部下の方が天使の相次ぐ召喚に精神力を使い果たし、幾人も昏倒している始末。
その原因となったのは、やはりあの巨大な戦士。
ガゼフはその武技もあり、天使達を倒せるだけの攻撃力は備えているが、宝具を取り上げられてしまっている分、体力と耐久力に難があった。
それが護る事に長けた彼とコンビを組む事で、眼を見張る程のシナジーを発揮していたのだ。
天使達の攻撃をデスナイトが引き付け、受け止めたところでガゼフが天使達を一刀のもとに切り伏せる。攻撃後の隙もまたデスナイトがカバーするため、彼は攻撃だけに力を尽くす事ができた。
一刻、二刻と時間は流れ、兵達は死亡者こそ居ないものの残らず疲労困憊。
ガゼフ達の足手まといにならぬ様、身体を引き摺って戦域から徐々に離れていき、残ったのは彼ら二人だけだ。

「…望外の結果だな」

それでもガゼフは大いに満足していた。なにせ目的であった村人の対比成功はほぼ確定。巻き込んでしまった部下達も上手くいけば助かる可能性があるのだから。
付き合わせてしまうデスナイトには悪い事をしたとは思うが、ガゼフだけでは法国の部隊と拮抗した状況など作り出せはしない以上、最期まで付き合ってもらう必要がある。
謝罪は全てが終わってからすれば良い。今は目の前の敵に王国戦士の誇りと意地を嫌という程見せつけてやるのが先だ。

こちらの体力も気力もあと僅か。ガゼフはダメージ覚悟で、一気に隊長を狙うつもりでいた。この身が朽ちる前に、一人でも多く刺し違えてやろう。決意を新たにボロボロの剣を構え直すガゼフ。

「――切り札を切る」

隊長であるニグンがそう口にした瞬間、今まで困惑と疲弊の中にあった隊員達の表情が変わった。

「最高位天使の召喚だ。絶対に包囲を破られるな」

相手は最早二人、体力もそう残ってはいないだろうが、予想外に時間を掛けさせられた。

今考えられる最悪の結果は、櫛の歯を欠くように戦線から離脱していった彼奴の部下達が別働隊なり援軍なりと合流、戦士長の殺害に失敗するだけではなく、裏の繋がりまで明るみに出てしまう事だ。

そのような事になれば、ニグンの命を持っても償いとはなりはしない。無能を六大聖典の長としてはならないのだ。

故にこその切り札。

戦士長だけではなく、異様な程の身体能力を持った、戦士長に並ぶ程の戦士。

英雄級二人を一度に葬る為の出費とするならば決して悪くはない。

決意を持って発せられた言葉に隊員達も落ち着きを取り戻し、鋼の顔で　彼の号令を待つ。

「――行け！」

「っ!?　何だ、動きが急に……っ」

おかしい。

仕切り直し後の敵の動きはこれまでのそれとは大きく様相を変えていた。
これまでの、包囲を徐々に狭めて削り潰すような戦い方ではなく、隊長狙いの彼の思考をまるで読んだかのように分厚い壁のような陣形を作り、自身からは動こうとしない。
あからさまな時間稼ぎの陣形にガゼフは、まるで首筋がチリチリと焦げるような焦燥感に襲われる。

「くっ……くそ！　そこを、退けえッ!!」

一縷の望みをかけて天使達の壁に突っ込むまガゼフだが、伊達に彼らも法国屈指の特殊部隊ではない。単独での戦闘能力こそガゼフに劣れど、血の滲むような訓練で身に付いた連携は、如何に相性が良くとも即席コンビのガゼフ達の及ぶ所ではないのだ。この一時だけを凌ぎ切るため、捨て身で天使たちがガゼフ達を抑えにかかった。
そして、その時が来る。

「――ガゼフ・ストロノーフ。お前は良く戦った。
認めようではないか。貴様はあの腐った王国には勿体ないほどの、真の兵であったと。
本当に、貴様が神の御許に産まれていればどれだけ……いや。詮なき事か。
だが、既に時は満ちた。
貴様とその男の健闘もここまでだ」

勝敗が決し、勝者が敗者に対してよく戦ったと称える言葉。
本来であれば傲慢な筈のその言葉は、ガゼフにはまるで自分にも言い聞かせているように聞こえた。
そして右手で恭しく掲げられた水晶。神聖な雰囲気を感じさせるそれが、今は目も覆わんばかりの光を湛えている。
天敵の予感に横のデスナイトが低く唸り、圧倒的な存在の予感にガ

ゼフの背筋に鳥肌が立つ。
そして、光が弾けた。
「――さあ、刮目せよ。最高位天使の降臨だ!!」

「「って、主天使かよ!?」」

ガゼフ達が絶体絶命のピンチに陥りつつある一方で、ナザリックに一時戻っていたアインズは隣のヤマネと揃ってツッコミを入れていた。
こちらも思った以上にガゼフが粘っていたため、手持無沙汰になったアインズが村をセバス達に任せて一度戻ってきたのだ。
ナザリック内の大浴場でひと汗流し、軽食をつまみながらソファーにもたれていた二人。敵の切り札が魔封じの水晶だという事が分かり、すわ強敵の登場か!? と固唾を飲んで見守っていればこの結果である。安心三割がっかり七割の複雑な気分だった。

「いやまあ主天使でもあのクラスから見れば相当な上位存在なんだろうけどさ、逆にアイテムが勿体ないっつの……」
「ま、まぁアレだ。万一の危険も無いってことで。　……あ、ほら！　状況が動くぞ！　存分に支配者ロールやって来い」

水晶を見ればちょうどデスナイトが戦士長を庇い、その身に主天使の極光を受けていた。急がねば手遅れになりかねない。
いつものローブを羽織り、大きく深呼吸をすれば、そこには今までのだらけ切った男の表情ではなく、「役者（アクター）」の顔があった。

「――行ってくる」
「おう、行ってこい」

ここからが、彼にとっての本番だ。